

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）： 学術調査隊による写真コレクションを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): travelogue Geographical Society missionary photograph Mongolia 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009643

研究ノート Research Note

モンゴルで撮影された写真の歴史（1880–1930）

—学術調査隊による写真コレクションを中心に—

小長谷 有 紀*

Expedition Photographs of Mongolia (1880–1930)

Yuki Konagaya

本稿は、19世紀末から20世紀初頭にかけてモンゴルを訪問したさまざまな調査隊が撮影した写真について、研究上の重要な資料として利用されるように概要を紹介するものである。一次資料となる写真は各国のアーカイブなどで保管されているため、国別に扱う。具体的には、ロシア地理学協会などの地理学協会や、北欧諸国の博物館など、調査隊の派遣元や資料の所在地ごとに写真コレクションを紹介する。こうした総合的な紹介は、とりわけコレクションの横断的な比較分析研究に寄与するであろう。

This paper presents an overview of photographs taken by various foreign expeditions to Mongolia in the late 19th and early 20th centuries, to present these photographs as one resource for research. The original photographic materials are kept archived in the respective countries conducting the expeditions. Therefore, this report describes each institute that dispatched expeditions, as well as the present locations of photographs, such as the Russian Geographical Society or museums in Nordic countries. This comprehensive introductory paper will contribute especially to cross-collection, comparative analysis studies.

*日本学術振興会、国立民族学博物館

Key Words : travelogue, Geographical Society, missionary, photograph, Mongolia

キーワード : 旅行記, 地理学協会, 宣教師, 写真, モンゴル

1 はじめに	4.4 ハンガリーからの学術調査隊
2 ロシアの学術調査隊	4.5 スウェーデンからの学術調査隊および宣教団
2.1 ロシア地理学協会による学術調査隊	4.6 その他の国々からの学術調査隊
2.2 ソ連科学アカデミーモンゴル委員会による学術調査隊	4.6.1 デンマーク
3 ロシアおよび中国の商人による写真	4.6.2 ノルウェー
4 ヨーロッパからの学術調査隊	4.6.3 アメリカ
4.1 イギリスにおける資料の所在	5 一般旅行者などによる写真記録
4.2 フランスにおける資料の所在	6 さいごに
4.3 フィンランドからの学術調査隊	

1 はじめに

モンゴル国に保管されている史料を用いて写真撮影の歴史をまとめた B. Baasanjargal によれば、モンゴルにおける写真撮影はまず外国からの研究者や旅行者による写真撮影に始まり、続いてボグド・ハーン政権期（1911–1924）の 1921 年、典籍研究所が設立されると資料収集調査が実施され、写真撮影も実施された（Baasanjargal 2013: 31）。

同研究所は、1925 年、ソ連科学アカデミーと協定を結び、同年、ソ連では、ソ連人民委員会議のもとにモンゴル科学研究委員会（通称、モンゴル委員会。以下、モンゴル委員会と記す）が設置され、毎年、モンゴルに複数の調査団を派遣するようになった（Yusupova 2006; Yusupova and Chuluun 2019: 58）。調査領域は考古学、生物学、地質学、言語学など広範囲にわたった。さらに 1929 年からはモンゴル典籍研究所とソ連科学アカデミーとのあいだで 5 カ年計画が締結され、その間の 1930 年、同研究所はモンゴル科学アカデミーとなり（Boldbaatar 2003）、ソ連とモンゴルの共同による学術調査が遂行された。

このように、外国人とりわけロシア人学者の先導によって、モンゴルを撮影した写真コレクションが形成されていく。本稿では、Baasanjargal（2013）や Teleki（2001）などによる整理を参照しながら、これまでの筆者らによる国際共同研究の

調査と研究会の成果に基づき¹⁾、モンゴルへの来訪者による写真撮影について整理する。とりわけ、ロシア、イギリス、フランス、フィンランド、スウェーデンについては、現地調査に基づく資料の保管状況に関する情報を含む。

対象としている写真は、おおよそ 1880 年から 1930 年に限定する。なぜなら、1851 年にコロジオン法によりガラス乾板を用いる写真技術が発明され、さらに 1870 年代にガラス乾板が工業製品として製造されるようになると、利用層が広がり (高橋 2017: 8-9)、モンゴルへの学術調査でも本格的に利用されるようになるのは、後述するように、1880 年ごろからであるからである。一方、ガラス乾板に代わってロールフィルムを用いる技術が一般的となり、1925 年にライカが発売されると写真撮影は急速に大衆化していくので、1930 年代になると、もはや希少性は失われ、社会主義建設のためのプロパガンダとして積極的に写真が利用される時代に入ってしまうからである。

来訪者たちの目的は、学術、商業、軍事、布教など専門に応じて多様であるとともに、また相互に密接に関連している。本稿ではあくまでも便宜的に、学術とそれ以外に分けて叙述する。さらに便宜的に、ロシアとそれ以外に分け、ヨーロッパを現在の国別に分けて整理する。実際に来訪者たちを国別に分けるのは難しい。例えば、フィンランド出身のマンネルハイムは、後述するように、ロシア軍の命を受けて諜報活動を目的にフランスのポール・ペリオの学術調査隊に参加した。この 1 事例を見ても、写真技術が確立する 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、近代はまさに国家の枠組みが大きな意味をもつ時代であったことが了解されよう。言い換えれば、いかに国別に分け難くとも、国別には意味がある。本稿の目的は、写真資料の総合的な把握にあるため、もっぱら資料の所在地を考慮しながら国別に叙述する。先の事例で言えば、マンネルハイムの資料についてはフィンランドの事例として言及し、ポール・ペリオの資料についてはフランスの事例として言及する。

本稿で取り上げる主要な来訪者については、以下、原則として初出時にローマ字でフルネームを示すとともに、わかる範囲で生没年を示す (附表 1 参照)。こうした著名な旅行家を支えていたのは地元出身のスタッフではあるが (Shearer 2019)、本稿では写真家以外は扱わない。

もっぱらモンゴル国を扱うが、来訪者はその旅程で現在の中国内モンゴル自治区や新疆ウイグル自治区などを訪問していることもあり、広くモンゴル高原を含

めてモンゴルとして扱う。なお、本稿で言及される文献のうち、写真資料の源となりうるアルバムや旅行記など史料文献と、研究史上の参照文献はそれぞれ別に提示する。

2 ロシアの学術調査隊

1714年にピョートル大帝が創設したクンストカメラ（現在のロシア国立人類学・民族学博物館）で古写真や史料を整理している D.V. Ivanov の調査結果によれば (Ivanov 2014), 最も古いモンゴルの写真は、ロシア科学アカデミーの物質文化史研究所 (Institute of the History of Material Culture, IIMK) に所蔵されている。ロシア政府が 1874–1875 年、中国に派遣した科学商業調査団 (Russian Scientific-Commercial Expedition to China) に随行した写真家ボヤルスキー (Adolf-Nikolay Erazmovich Boyarsky) による写真アルバムである。

同アルバムは全部で 138 点の写真から成り、ウルガ（現在のウランバートル）にある活仏の宮殿の遠景 1 点と内モンゴルの写真 5 点が含まれる。内モンゴルの写真としては、南部のチャハルについてゲルと民族衣装をつけた女性の 2 点、西部のアラシャンについてはチベット風の衣装を身につけた男性たちと、中国の衣装を身につけた貴族たちの 3 点である。これほど少ない写真によっても、モンゴルの地域的な多様性が示されると同時に、モンゴル国については首都の政庁である活仏宮殿が捉えられている（写真 1）。

同アルバムは、現在、国立ブラジル図書館にも所蔵されており、それらはユネスコとアメリカ議会図書館が運営する世界デジタル図書館で提供されている²⁾。

さらに、同研究所 IIMK にはロシアの最初の写真家とされるラーニン (Vladimir Vasilievich Lanin / 1826–?) による写真コレクションがある³⁾。ラーニンは 1875–1876 年、極東およびイルクーツクを旅行し、買売城（中国人商業街、複数の買売城のうち、おそらく現在の、ロシア国境に付近にあるアルタンボラグと思われる）の写真数点を撮影した (Ivanov 2014: 59)。

こうした初期の写真を経て、組織的に派出される学術調査隊が写真を撮影するようになる。以下では、時代を反映させながら派出機関別に分けて、ロシアの学術調査隊による写真撮影の歴史を叙述する。

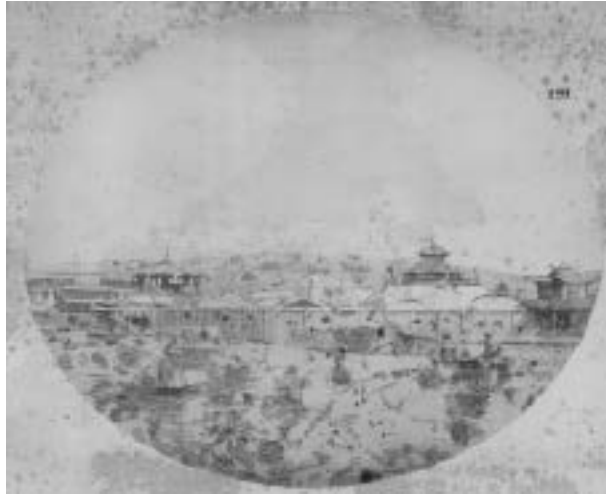


写真1 ボヤルスキーの1874年撮影によるボグドゲゲン宮殿（国立ブラジル図書館所蔵の *Album of Russian Scientific-Commercial Expedition to China*、世界デジタル図書館オンラインデータベースより。<https://www.wdl.org/en/item/2128/>）。左端にマイダル寺院の屋根が見えることから、板塀の南西角から北東方向を撮ったと考えられる。

2.1 ロシア地理学協会による学術調査隊

1925年にソ連でモンゴル委員会ができるまで、ロシア人による学術調査隊の主たる派出元はロシア地理学協会（Russkoe Geographicheskoe Obshchestvo に基づいて、RGO と略す）であった。同協会は1845年、フランス、ドイツ、イギリスについてヨーロッパで4番目に設立された。ニコライ1世（在位1825–1855）時代のことである。

当時は、皇帝をとりまく保守派と改革派とが争っており、前者が西欧列強に追随しようとするのに対して、対抗的な改革派ナショナリストたちにとっては「メシア的なロシアの将来像が冒険的、積極的かつ革命的でさえある外交を希求していた」（Riasanovsky 1969: 137–138）。メシアニズムすなわち宗教的使命感こそはロシア思想の根幹である（高野1998）。当時の地理学者の言説にも、ヨーロッパのなかでもっともアジアに近いのはロシア人であり、自分たちこそがアジアの未開人を文明へと導かなければならない、というメシア思想が明らかに認められた

(Bassin 1983: 243)。ロシアのメシアニズムは、いわば「脱欧入亜」の感情を人びともたらしていたのであった(小長谷 2017: 123)。自らの名前に調査地キルギスの「天山」を入れてメシアニズムを刻んだ、セミョーノフ(Pyotr Petrovich Semyonov-Tyan-Shansky / 1827–1914)は、1873年から1914年までRGOの副会長を務め、後述するようにモンゴルへの学術調査における写真撮影を支援した。

RGOは創設3年後、1848年に「帝立」となり、ロシアの内部対立を越えてロシアの総意として、ナショナル・アイデンティティの探求を担うこととなる(Bradley 2009: 86–127)。RGOは、1850年にカフカス支部、1851年にシベリア支部、北西支部、1868年にオレンブルク支部、1873年に南西支部、1877年に西シベリア支部というように、次々と支部を設立した(天野 2006: 111)。また、シベリアやモンゴル、中央アジアへ続々と調査隊を送り出した。組織の名称こそ地理学だが、その調査は博物学的であり、多様な学問領域に及んだことはいうまでもない。こうした支部や調査の展開は、まさしく軍事と密接に関連している(Hauner 1990: 41)。

1870年から1920年にかけてモンゴル調査は150隊組織された(Darevskaya 2011: 232)。そのうちの多くがRGOによると思われる。RGOのアーカイブ部門で整理にあたっているM. F. Matveevaによれば⁴⁾、同アーカイブには144人の調査者別コレクションがあり、そのうち、中央アジアおよびモンゴルに関連してプルジュワルスキー、ポターニン、グルム・ゲルジマイロ、コズロフ(各人については後述)などによる写真コレクションがある。

M. Haunerが上掲書同頁で挙げている、初期の著名な科学者のうち、モンゴルへやってきたのはポーランド生まれの動物学者ラッデ(Gustav Ivanovich Radde / 1831–1903)である。彼は、1856–1859年にモンゴル国中央部のアルハンガイや北部のフスグル湖まで踏査し、ドイツ語で『南および東シベリア旅行記』(Radde 1862–1863)を著した。美しいカラーの挿絵があるものの、写真は無い。彼によって収集された植物標本はサンクトペテルブルグ植物園コマロフ植物研究所に保管されている。

同植物園にはプルジュワルスキー(Nikolay Mikhaylovich Przhhevsky / 1839–1888)による標本資料も保管されている。よく知られているように、彼はそもそも軍人であった。1867–1869年にウスリー、1870–1873年にキャフタからゴビへ向

かい、チベットに至り、1876-1877年にタリム盆地でロプノール湖を探し、1879-1880年にはチベットをめざして青海、1883-1885年に黄河からタクラマカン砂漠へと5度の調査を率いた。2度目の調査において広範囲に踏査して、動植物の標本資料を多数、収集した。その偉大な功績により、RGOの最高賞であるコンスタンチン金メダルを授与されている。2度目の調査の報告書『モンゴルおよびタンゲート人の国』(Przhevalsky 1875; プルジェワルスキー 1939)の場合、ロシア語原著に写真はなく、1876年刊行の英訳本にはイギリス王立地理学協会などから入手した写真を参考にして描かれた挿絵が加えられている(Prejevalsky 1876)。4度目の調査の報告書である『キャフタから黄河源流へ』(Przhevalsky 1888)には写真が掲載されているものの、それらは5度目の調査時に帯同された学生ロボロフスキー(Vsevolod Ivanovich Roborovsky)が撮影を担当したものである。

プルジェワルスキーの報告書にみられる写真の、上述のような経緯が示すように、ロシアの学術調査隊による写真撮影が本格化するのは1880年代からである。

モンゴルの写真史上、まず特筆されるのはポターニン(Grigory Nikolaevich Potanin / 1835-1920)である。彼は地理学者、植物学者であり、ヤドリニンツェフ(後述)とともにシベリア自治運動に参加し、シベリアに流刑された民族学者である(田中 2013)。1876年、RGOの求めに応じて調査隊に加わり、1876-1877年および1879-1880年の2度にわたりモンゴル西北部を踏査し、『西北モンゴル概説』4巻(Potanin 1883)を著した。そのうち第2巻が『西北蒙古誌』として邦訳されている(ポターニン 1945)。続いて、1884-1886年と1892-1893年にはさらに南部を調査し、『中国のタンゲート、チベット辺境とモンゴル中央部』2巻(Potanin 1893)を著した。膨大な学術資料を収集した彼に、RGOは1896年、コンスタンチン金メダルを授与した。

これらのポターニンの著作に挿入されている図版はもっぱらスケッチである。写真撮影は、1879年、すなわちポターニンの2度目の西北モンゴル調査隊に参加した、アドリアノフ(Andrey Vladimirovich Adrianov / 1854-1920)が担当した。彼については伝記がある(Devlet 2004)。それによれば、以下のように、思想犯としてシベリアへ追放されて民族学を志すという当時の典型的な研究者の1人であると言えよう。

アドリアノフは、トボリスクの司祭の家に生まれ、1874年にサンクトペテルブ

ルグ医科大学に入学し、その後、サンクトペテルブルグ大学に入学した。医科大学にいた際、写真技術を学んだ。サンクトペテルブルグで、ポターニンやヤドリツェフと出会い、大きな影響を受けてシベリアへの民族学的関心を深めた。ポターニンの調査隊に参加した後、1880年にRGOから銀メダルを授与された。シベリア各地に住み、1915–1916年には独自にウリヤンハイ（現在のトゥバ共和国）へ赴いた。1917年から1919年のあいだ、「シベリア生活」という新聞を刊行し、1920年、トムスクでボルシェヴィキに逮捕され殺害された。

アドリアノフの写真は、ポーランド出身のワルネルケ L. V. Warnerke (1827–1900) が1877年に開発した、世界最初のロールカセットとされる、臭化銀コロディオンをういたカセットテープ式のカメラで撮影されたものである。ポターニンの報告書には、彼の撮影による写真70点が掲載されている（上述の Matveeva 氏の発表による。前注4参照）。

すでに1879年、写真アルバム『西北モンゴルの自然と（人びとの）種類』（ロシア語版とフランス語版。なおフランス語版のタイトルでは西北モンゴルではなく西モンゴルである）が作成された。白いカルトン紙に1–2点ずつ焼き付けられているものである（写真2）。

クストカメラには、アドリアノフが撮影した写真64点がネガティブとともに寄贈された（コレクション番号128）。D. V. Ivanovらによって『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第2巻（Chuluun and Ivanov 2015）に収載されている。

ポターニン夫妻は、1888年にウルガに来た際、トロイツコサフスク（キャフタ）在住のチャルーシン（Nikolay Apollonovich Charushin / 1851–1937）を伴った。チャルーシンは写真技術者であると同時に、キャフタで写真サロン（写真館）を経営する企業家であった。彼は、優れた助手フョドロフ（Ivan Fedrovich Fyodorov / ?-?）とともにモンゴルの写真を撮影し、200点以上からなる写真アルバム『ウルガの風景』（Charushin 1888）を製作した。チャルーシンとフョドロフについては、次の章で補筆する。

ポターニンのチベット方面への調査に関しては、1893年の報告書に使われた、86点の紙焼き写真と170点のネガがRGOアーカイブに残されている。また、ポターニンによる1899年の大興安嶺への調査に関しては、アメリカ議会図書館のオンラインで、東部のケルレン川風景など18点の写真が確認される⁵⁾。



写真2 クンストカメラ所蔵のポータニンとアドリアノフのアルバムより。
上：写真 2-1 ロシア語版（Chuluun and Ivanov 2015: 23）
下：写真 2-2 フランス語版（Chuluun and Ivanov 2015: 33）

ヤドリツェフ (Nikolay Mikhaylovich Yadrintsev / 1842–1894) によるシベリア・モンゴルの広範な調査で 1889 年に突厥碑文が発見されると、1891 年、ラドロフ (Vasily Vasilievich Radlov / 1837–1918) によりオルホン溪谷に調査隊が派遣され、『モンゴル遺跡地図』(ドイツ語原著 1892 年) が刊行された。また、クレメンツ (Dmitry Aleksandrovich Klements / 1847–1914) は、1897 年に現在のウランバートル市郊外でトニユククの突厥碑文を発見した。彼らによって、これら突厥時代の遺跡周辺の写真が撮影されている。

彼らのうち、クレメンツは、現在のサラトフ州にあるゴリアイノフカ村で生まれ、カザン大学で学んだ。1870 年代、サンクトペテルブルグで秘密結社チャイコフスキー団に加わったため、1872 年から 73 年にかけて労働者教育を受けた後、1875 年、ベルリンやソルボンヌで学んだ。1878 年にロシアへ帰国後、逮捕されてシベリアへ流刑される。シベリアではミンスク博物館で資料整理にあたり、1886 年資料集を刊行し、民族学の恩師 (Nikolai Mikhailovich Martiyanov) と結婚して、1889 年に家族でイルクーツクへ移住した。調査研究の成果は RGO に報告されている。1891 年にラドロフとともにオルホン調査班を組織し、1893 年にはヤクーチヤを調査した。1894 年からは夫婦ともどもウルガに暮らして民族学、言語学、地質学、地理学など幅広く調査を行い、野生動物の写真を 400 点近く撮影した (Baasanjargal 2013: 9–10)。また、長期的にクンストカメラに対して人類学的な標本資料や写真 (コレクション番号 621 および 622) を提供した。それらの写真は『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第 2 巻 (Chuluun and Ivanov 2015) に収載されている。

1894 年には、キャフタから来た商人ルシニコフ (Aleksandr Alekseevich Lushnikov / 1872–1947) とともに、ウルガからハンガイ山地、アルタイ山脈、ゴビ地域、西部中心地ウリヤスタイを旅行し、このルシニコフが『モンゴル旅行の記憶』という写真アルバムを制作した (Lushnikov 1894)。さらにルシニコフは、キャフタ博物館の学芸員で後に博物館長を務めたミクノ (Pyotr Savvokh Mikhno / 1867–1938) をリーダーとするフブスグル調査 (1902 年) にも同行して、モンゴルの動植物に関する写真を 70 点以上撮影した。ルシニコフについても、次の章で補筆する。

ポズドネーエフ (Aleksey Matveevich Pozdnev / 1851–1920) は、ポターニンの最初のモンゴル調査に参加して文献を収集し、1892–1893 年にモンゴルを旅する際には上述のフョドロフを撮影者として帯同した。ポズドネーエフの詳細な旅行

記『蒙古及蒙古人』(Pozdneev 1896-1898; ポズドネエフ 1908)の序において、6月23日の記載として、当時26歳だった彼をキャフタで1年500ルーブル、1ヶ月41ルーブル66コペイカで雇用したとある(ポズドネエフ 1908: 25)。

思想家として知られているグルム・グルジマイロ(Grigory Ephimovich Grum-Grshimailo / 1860-1936)は、プルジェワルスキー、ポターニン、セミョーノフの調査に同行した昆虫学者で、1907年にRGOよりコンスタンチン金メダルを授与されている。1914年に調査報告書『西北モンゴルとウリヤンハイ』(Grumm-Grshimailo 1914)が刊行され、38点の写真とおよそ40点のネガがRGOアーカイブに保管されている。

探検家コズロフ(Pyotr Kuzmich Kozlov / 1863-1935)も特筆される。彼の調査行の詳細はYusupovaら(Yusupova 2008; Andreyev and Yusupova 2018)に譲り、モンゴルに関しては、6度の中央アジア調査行のうち1907-1909年のカラホト黒水城の発掘、1923-26年のノインオーラの発掘がとりわけ知られている。黄河源流に至った1899-1901年の調査行は『モンゴルとカム』全5巻として刊行され(Kozlov 1905-1907)、1907-1909年の調査行は『モンゴル、アムドと死の町カラホト』として刊行された(Kozlov 1923)。これらの書籍中には、かなりの写真が含まれている。コズロフの1923-1926年の調査で撮影された写真は『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第4巻(Chuluun et al. 2018)で刊行された。

コズロフは自らカメラを持ち、多くの写真を撮影した。その膨大な写真は、RGOと、同じくサンクトペテルブルグにあるコズロフ博物館に残されている。ただし、キャプション等がついていないものも多いため整理はきわめて難しい状況にある。コズロフは、1905年、イギリスの侵攻を避けてウルガに滞在していたダライ・ラマに謁見し、写真を拒絶されたので肖像画を描いてロシア皇帝に謹呈したことがよく知られている。ただし、ダライ・ラマ本人は、西洋文化に興味を持ち、写真にもかなり興味を持っていた(Lomakina 2001: 128-130)。

2.2 ソ連科学アカデミーモンゴル委員会による学術調査隊

1924年にモンゴル人民共和国が成立すると、約20年間に64の学術調査が実施され、そのほとんどがソ連政府およびソ連科学アカデミーによるものであった(Baasanjargal 2013: 8)。

ソ連科学アカデミーによるモンゴルでの調査結果は、報告書に加えて写真アルバムもモンゴル側に提供されていた。これらの写真資料は、現在、モンゴル国立図書館の写真アーカイブにまとめられている。同アーカイブの調査によって (Yusupova and Chuluun 2019), 次のような 5 件のアルバム等が確認された。

アムステルダムスカヤ (Lydmila Alekseevna Amsterdamskaya / 1903-?) の写真アルバム。レニングラード大学の大学院生だった彼女は、1927 年夏、モンゴル語ハルハ方言の調査でヘンティー地方を訪れた。26 点の写真から成る。

カザケーヴィッチ (Vladimir Aleksandrovich Kazakevich / 1896-1937) の写真アルバム。1923-1925 年、レニングラード大学東洋言語学研究所からモンゴルに派遣され、1927 年には言語学者ポッペ (後述) による調査に同行し、1929 年、独自でモンゴル国東南部のダリガンガ地方において方言調査を実施した。ダリガンガ調査の写真アルバムは 40 点の写真から成る。

コズロワ (Elizaveta Vladimirovna Kozlova / 1892-1975) の写真アルバム。上述したコズロフの妻、コズロワは鳥類学者として 1929 年、ハンガイ地方の動植物の調査を行い、117 種の鳥、16 種の哺乳類などを確認した。報告書に付随する写真集『ハンガイの風景』は 31 点の写真から成る。

オストロヴェツキー (Kazimir Leonardovich Ostrovetsky / 1889-1938) の写真アルバム。1926-1927 年、モンゴル委員会による地球化学的調査の記録。139 点の写真から成る。もっぱら景観写真である。

ポッペ (Nikolay Nikolaevich Poppe / 1897-1991) の写真アルバム。ポッペは 1927 年のモンゴル委員会の調査団を率いた。同団は 4 つの班から構成され、ポッペ自身もそのうちの 1 班を率いて、モンゴル語系ダウール語を調査した。12 点の写真から成る。それらはすべて、サンクトペテルブルグの東洋文献学研究所に所蔵されている、ポッペによる写真アルバム『モンゴルの風景と種類』に掲載されている。

アルバムではないが、コズロフ隊のメンバーであったシムコフ (Andrey Dmitrievich Simukov / 1902-1942) やクリャギナ・コンドラティエワ (Melitina Ivanovna Klyagina-Kondratyeva / 1896-1971) などの写真が多く残されている。

シムコフは、コズロフ隊による調査の後、16 年間、モンゴル科学アカデミーの草創期に尽力した。彼と彼の妻が撮影した写真は、著作集 (Konagaya et al. 2007a; 2007b; 2008a; 2008b) のうち第 1 巻と第 2 巻の末尾に掲載されている。

クリャギナ・コンドラティエワは、シムコフがモンゴル科学アカデミーに貢献したように、同アカデミーの図書部門に貢献した。彼女の1926年から1930年までの寺院研究は、近年まとめられた (Chuluun and Yusupova 2013)。ヘンティーからハンガイにかけて寺院の破壊以前の姿を留めているため貴重である。

現在のロシア科学アカデミーの歴史文化研究所にあるモンゴル調査記録のうち、考古学者ボロフカ (Grigory Iosiphovich Borovka / 1894-1941) が、1925年のトーラ川沿いの調査の際に撮影した写真は、『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第3巻 (Chuluun and Medvedeva 2017) で刊行された⁶⁾。彼の没年は、シムコフ同様、スターリン粛清の犠牲者であることを示している。

ソ連政府から派遣された人々も写真を撮影し、残している。例えば、ボグド・ハーン政権期の1916年にモンゴルへ派遣された財務アドバイザーのコージン (Sergey Andrevich Kozin / 1879-1956) らは72点の写真からなる『モンゴルの景観』というアルバムを制作した (Baasanjargal 2013: 14)。このコージンは森林資源の管理を進めたため、森林利用税をモンゴル語で *goojin* と呼ぶようになったほど (Idshinnorov 1987: 43)、モンゴルの政策に大きな影響を与えた。

また、モンゴル政府に派遣された第1次保健衛生調査団は1926年10月から3ヶ月間看護師4人を含む15人で組織され、メンバーの医師 N.A. Semashko, M.F. Vradinirsky, G.N. Kamensky らによる写真アルバムが残っているという (Baasanjargal による2020年4月12日の私信による)。

1918-1920年にモンゴルに滞在し、国勢調査を実施したことで知られているマイスキー (Ivan Mikhaylovich Maisky / 1884-1975) たちの資料のうち、私信などは『20世紀のドキュメント』で公開されているものの⁷⁾、写真が残されているかについては不明であり、今後の調査が期待される。

3 ロシアおよび中国の商人による写真

1861年、ウルガにロシア領事館が設置されてから、ロシア人によるモンゴルでの商業が活性化したことは、ロシア人の数から明らかである。E. Boikovaによれば、1876年にコブド (ホブド) に15-20人、ウリヤスタイに5人、1892年にはウルガに100人、コブドとウリヤスタイにそれぞれ15-20人、1910年にウルガに

600 人、コブドとウリヤスタイにそれぞれ 40–50 人、1912 年には全体で 1,500 人と算出されており、その多くが商人であった (Boikova 2002: 13–14)。また、『ホブド簡史』にはロシア商人の数に加えて具体的な商店名も提示されている (Gongor 1964: 81–84)。これらはそもそもプルジェワルスキー、ポズドネーエフ、マイスキーの記録に基づいている。ポズドネーエフによれば、ウルガではロシア商人が撤退しつつあり、中国商人が 10 倍増になっているのに対して (ポズドネフ 1908: 130)、ホブドからウリヤスタイあたりの西北モンゴルにおいては 1880 年代から、中国貿易よりもロシア貿易がまさるようになった (ポズドネフ 1908: 361–365)。

1910 年、RGO のトムスク支部はモンゴルへ調査隊を派遣し、22 点の写真を含む『ロシア・モンゴル商業論』(Bogolepov and Sobolev 1911) をまとめた。添付された地図によれば、モンゴル国および国境周辺にあったロシア商店は 122 軒を数え、キャフタには 8 軒、ウルガには 20 軒、両地のあいだのヨローなどにも数軒分布しているグループと、ウリヤスタイには 11 軒、ホブドには 10 軒が認められる (Bogolepov and Sobolev 2011) (図 1 参照)。

ロシアからの商業ルートはキャフタから南下してウルガへ至るルートと、アルタイ地方のビースクから南下してホブド、ウリヤスタイへ至るルートの 2 本が存

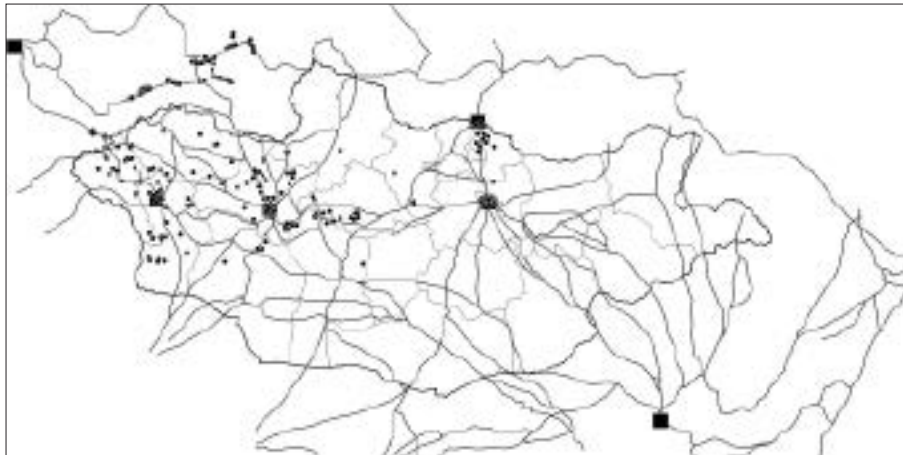


図 1 ロシア商店の分布と道路
(Bogolepov and Sobolev 2011 の添付図より鈴木康平氏の作成)

■は主要都市
西からビースク、ホブド、ウリヤスタイ
東部は北からキャフタ、ウルガ、張家口

在した。両ルートを利用する商人たちは、それぞれ「キャフタ商人」と「ビースク商人」に区別される。後者のルートはチュイスキー路とも呼ばれたため、革命前はチュイスキー商人と呼ばれていた。このチュイスキー路によってビースク商人たちが、モンゴル西部で広範囲な商業活動を展開していた。

19世紀末、キャフタ商人はもっぱら茶を扱って北へ輸出するのに対して、ビースク商人たちは、ウラル地方のイルビートでロシア商品を仕入れてモンゴルで販売し、モンゴルからは羊毛やタルバガンの毛皮を輸出した。

ビースク商人については、ポターニンやポズドネーエフの旅行記に比較的详细に記載されており、うちイグナティエフら3人（I.G. Ignatiev と A.D. Vasenev と F.I. Minin）はクンストカメラに残されているクレメンツの写真と照合することができる（Chuluun and Ivanov 2015: 91）（写真3）。

このように写真によって商人を確認することができる一方で、上述のように学術調査隊はしばしば写真技術を有する商人を伴っていた。彼らは、学術調査隊の記録写真を撮影するばかりでなく、写真館を経営してポストカードを販売するなど、写真を収入源とした（Saburova 2020: 64 など）。

キャフタにはチャルーシンやルシニコフが拠点を構えていた。

チャルーシンについての伝記（Sergeev 2001; Eklof and Saburova 2017）を以下に、



写真3 ウリヤスタイの商人。左から Minin, Vasenev, Ignatiev とその家族。
(Chuluun and Ivanov 2015: 91)

要約しておく⁸⁾。

彼はスロバキアのオルロフ生まれのナロードニキ（革命運動家）である。1871-1872年、サンクトペテルブルグ技術高等学校で学ぶうち、1871年チャイコフスキー団（ナロードニキ弾圧後の秘密結社）に入会した。クレメンツと知り合い、民族学的な知識を吸収する。1874年に逮捕され、シベリアへ追放されて以来、当地「カラ」を名前に入れたという。1881年に解放され、1882年にネルチンスクで生活し、クズネツォフ（Aleksy Kirillovich Kuznetsov / 1845-1928）から写真技術を学ぶとともに、写真によって生計を立てることも做った。クズネツォフは1891年、ネルチンスクで鉱山労働者たちの肖像写真74点からなるアルバムを制作したことで知られている。この撮影にチャーレンも協力した。1886年に一家でトロイツコサフスクに移住し、翌年から写真館を経営した。キャフタ商人ネムチノフ（Yakov Andreevich Nemchinov / 1812-1894）の金鉱を撮影するため、助手のフォドロフとバイカル方面へも出かけた。

シベリアに追放されているチャーレンがロシア国外のモンゴルへ調査に出かけられるよう、ポターニンはセミョーノフに依頼した。言い換えれば、セミョーノフはこうしてモンゴル調査における写真撮影を支援したのである。チャーレンの撮影した写真は、クンストカメラにも所蔵されている（上述のウルガの風景はコレクション番号1697。コレクション番号1359はガロート湖にある寺院での仮面舞踏）ほか、RGOのサンクトペテルブルグ本部、イルクーツク支部ならびにモスクワやトムスクなど彼が関係した各地の学校に寄贈されたまま今日まで保管されている（Ivanov and Chuluun 2015: 19）。

さらに、北欧の博物館等における写真コレクションの中には、チャーレンによるポストカードがしばしば含まれており、普及していたことが了解される。

なお、チャーレンの撮影した写真は、キャフタのオブルーチェフ博物館に所蔵されているガラス・ネガティブを利用してアメリカ議会図書館オンラインで公開されている⁹⁾。

フォドロフについてはあまりわかっていない。ポズドネーエフによれば、幼い頃から製靴業を習い、ついでイルクーツクやキャフタでは写真店で働いて写真技術を学んだ。のちにクーロン（現ウランバートル）に2年間滞在し、ロシアのヴォロビョフ Vorobyov 商会で働き、写真業を営んだ。モンゴル語は流暢ではなかった

が、王侯貴族や僧侶たちと親密で、彼の協力がなければ写真撮影は叶わなかった (ポズドネフ 1908: 25)。クーロンではキャフタ貿易が衰退傾向にあり、ヴォロビョフ商会はすでに撤退しており (ポズドネフ 1908: 130)、写真の中にヴォロビョフの記載があっても実際に撮影したのはこのフョドロフであろうと判断されている (Ivanov and Chuluun 2015: 18) (写真 4)。

近年のキャフタ博物館収蔵庫の調査によって、『モンゴルの鉱山アルバム』が発見された (Darevskaya 2011: 54)。同アルバムにはモンゴロール Mongolor 銀行による資源調査に基づき、83 点の写真によってセレンゲ県ヨローなど各地の採掘現場が示されている。この銀行は、ドイツの鉱物学者であるフォン・グロート (Paul Heinrich von Groth / 1843-1927) が創設した採金会社で、後にロシア中国銀行／華俄銀行庫倫支店の傘下となる (Korostovetz 1926: 187)。撮影者は A. Porfiriev で、おそらく 1913 年の撮影であろうと推測されている (Darevskaya 2011: 54)。写真需要と資源開発の密接な関係を示す 1 事例となろう。

チャルーシン写真館の影響で、キャフタでは富裕層のあいだで写真が流行した。キャフタの有力な商家に生まれたルシニコフは、1898 年、ラドロフの求めに応じて、民族学博物館の館長になり、収集品、調度品とともに写真も撮影して集めた。技術的にはチャルーシンやフョドロフに劣るものの、撮影テーマの広がりや、キャ



写真 4 「買売城 (ウルガ) の通り」 (Pozdneev 1896-1898: 22)
写真の右下にヴォロビョフ商会の B マークがわずかに見える。

プシヨンの正確さが際立っている (Ivanov and Chuluun 2015: 18)。クンストカメラに寄贈された写真 (コレクション番号 1368) が『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第 2 巻 (Chuluun and Ivanov 2015) に収載されている。

ビースク商の 1 人であるブルドゥコフ (Aleksey Vashilievich Burdukov / 1883–1943) について、略伝は「独学の人」と表現している (Nyamdorj 2014: 11)。彼はトボリスクの農家に生まれ、ギリシャ正教会の学校で学び、1895 年に卒業すると、生計を立てるためにビースク商のひとつであるモキン Mokin 商会に入社した。1896 年、13 歳の時、家畜を追う人々とともにホブドの国境沿いまで来て、オイラート系バヤト族の暮らすハンギリツァグ川の支店で勤務し始めた。現地で語学を身につけ、学問を志して、コズロフ、ウラジミルツォフ、ポターニン、マイスキーなどに手紙を出して助言を求めた。と同時に、彼らによるモンゴル西部の学術調査を大いに支援した (Darevskaya 1994)。1912 年に現地で住民と共に協同組合を設立し、1914–1917 年は領事館で通訳を務め、1921 年革命期に避難する際、家族とともに逮捕され、ハタンバートル・マクサルジャブの軍によって解放された。ブルドゥコフはイルターツクから彼らに武器を提供していた。モンゴルから畜産物をソ連に輸出する目的で設立されたツェントロソユーズ (全ロシア中央消費組合) の支店で働いた。1926 年、ノボシビルスク支店の閉鎖に伴い、レニングラード (現在のサンクトペテルブルグ) へ移り、本格的に学問を志した。没後、娘によって回想録が、上述のような著名な研究者との往復書簡とともにまとめられている (Burdukov 1969)。

彼は、モンゴルの自然、社会、生活に関する写真を多く撮影し (Baasanjargal 2013: 14)、1913 年には 1 冊 125 点の写真からなるアルバムを 3 冊製作して、1 冊はポーランド出身の言語学者コトヴィッチ (後述) に、もう 1 冊はトムスクの地理学協会に、最後の 1 冊はビースク博物館に謹呈した。さらに、1914 年にはポストカードを製作して販売した。コトヴィッチの著作『モンゴルの歴史と現代政治に関する概説』(Kotwicz 1914) における 7 点の写真のうち、西モンゴル関係の写真はブルドゥコフより提供されたものであると考えられる。

1910 年、衰退傾向にあるとされるモンゴルとの貿易の将来性を探るため、モスクワの有力な企業家リャブシンスキー (Pavel Pavlovich Riabushinsky / 1871–1924) が先導して、商業調査団 (Moscow Trade Expedition to Mongolia) を組織し、モン

ゴルへ派遣した（Endicott 1999）。その報告書『(モンゴルへの) モスクワ商業エクスペディション』（Riabushinsky 1912）には、カラーのタンカ2枚を除いて、ウリヤスタイのイグナティエフ商店やウルガのモンゴロール銀行、農牧資源などもっばら商業に的をしぼった97点の写真が含まれている。

やや時代は下るが、1928年、ウランバートルには7人の写真家がいる、ドイツ人モンテトン（後述）の写真コレクションにロシア語で「写真」という看板が映っている（写真5）（Baasanjargal 2013: 27）。また、中国人の経営する写真館については、1948年まで存在していたことがインタビューから知れるものの（Baasanjargal 2013: 28）、詳細は不明である。



写真5 背後の板塀の上に掲げられた看板にロシア語で「写真屋」と記されている。モンゴル国立図書館の写真アーカイブに保存されているもので、Baasanjargal氏より提供を受けた。

4 ヨーロッパからの学術調査隊

ヨーロッパからの学術調査隊については、次のような方針で叙述する。

まず、ロシアに先行して地理学協会を設立していたイギリス、フランス、ドイツのうち、イギリス、フランスについては、地理学協会など資料の所在地がまとまっているため、所在地を中心にまとめる。したがって、必ずしも学術目的ではない旅行も含まれる。

次に、ヨーロッパにおいて特異な言語を国語とすることからアジアへの関心が高かったフィンランドとハンガリーを扱う。また、スウェーデンの場合は、長期滞在した宣教師の写真資料が民族誌に準じるため、学術調査隊に加えて扱う。

4.1 イギリスにおける資料の所在

19世紀初頭から20世紀にかけて、現在のアフガニスタンあたりからチベット、さらにモンゴルまでのユーラシア内陸部は、コーカサスにとどまらずインド洋を目指して南下するロシアと、インドの植民地経営を通じてロシアを阻止しようとするイギリスとのあいだで、支配権争奪の対象地域となっていた。当該地域とりわけアフガニスタンに関する英露間の情報戦の攻防は、一般に「グレート・ゲーム」と呼ばれる。1840年、東インド会社社員のA. コノリーがカンダハールに駐在していたSir H.C. ローリンソンに宛てた手紙で、チェスのゲームにたとえて「グレート・ゲーム」と呼び、この概念はさらにボンベイ生まれのイギリス詩人J.P. キプリングの児童文学『Kim』（1901）（邦訳タイトル「少年キム」）を通じて広く世に知られることとなったのだった（ホップカーク 1992）。

すでにイギリスでは1830年に王立地理学協会（Royal Geographical Society）が、フランス（1821）やドイツ（1828）に続いて設立されており（吉田 2010: 36-37）、当該地域に関する情報は同会に集積されている。

独立研究者であるSue Byrneの整理によれば、1720年から1935年までのあいだにモンゴルを訪問した旅行者はおよそ60名、そのうち写真コレクションがあると思われるのは34名である。S. Byrneの整理に基づき、王立地理学協会での調査結果をまとめて示す（附表2）。なお、この表におけるRGSはRoyal Geographical Societyを指す。

そのうち、北京駐在の軍人ビンステッド (Gerald Charles Binsteed / 1885-1915) が 1912-1913 年にモンゴルへ北上した旅の写真は『モンゴルとモンゴル人』シリーズ第 5 巻 (Chuluun and Byrne 2019) として刊行された。

一方、ロンドン大学 SOAS (the School of Oriental and African Studies) には、ロンドン伝道協会 (London Missionary Society) の資料が保管されている。同協会は 1795 年に設立され、当初はオセアニアへの派遣が主で、19 世紀になるとアジアへの伝道も活発になり、伝道博物館 (Missionary Museum) も 1810 年から 1910 年まで維持されていた。また、1908 年にはロンドンで The Orient in London という展示も行われた¹⁰⁾。1966 年、イギリスの植民地が独立して各国でローカルな協会が設立するようになると伝道協会は廃され、その書類や手紙など紙の資料は、SOAS に寄贈された。資料のリストはカタログとして公開されており¹¹⁾、デジタルでも検索が可能である¹²⁾。

モンゴルについての資料は 70 余点あり、なかでもスコットランド出身のギルモア (James Gilmour / 1843-1891) については手紙、レポート、肖像写真、ポスターカードなど 40 余点ある。一般に、派遣された神父たちは、書式の決まった日記をつけることになっており、また、本部に送られた手紙は到着時に要約をつけて整理されることになっていた。ギルモアの著作『蒙古人の友となりて』(Gilmour 1883; ギルモア 1941) は、布教活動としての成果がないにもかかわらず、多くの読者を獲得し、例えばスウェーデンのラーソン (後述) のように、ヨーロッパやアメリカからモンゴルへの布教活動を動機づけることになる。

興味深いことに、資料には『亜東印画輯』の英語版の写真が数点含まれていた (附表 2 参照。箱番号 A128/A129)。宣教師が現地で購入して資料として本部に送ったと考えられる。『亜東印画輯』は、大連にあった亜東印画協会が 1924 年から 1944 年まで制作して会員頒布していた写真集で、各写真に解説がついている。英語版も作成されていたことが初めて確認された。

4.2 フランスにおける資料の所在

フランスでは、国立図書館の地図部門が写真資料も扱っている。同部門は、リシュリュー通りにある旧館から移転したが、2019 年 7 月時点で旧館は改修中であつた。ミッテラン大統領時代に新築された図書館は、すべての資料を広く閲覧

に供するという方針で運営されている。カタログが公開されており¹³⁾、インターネット上で検索することができる。すでに多くの資料ができるだけ正確なコメントを付してデジタルで公開されており、カタログからの検索結果を表示することもできるようになっている。

例えば、イルクーツク出身の貴族トゥマノフ (Sergei Borisovich Tumanov / 1842–1890) による鉱物資源調査のアルバム (26 点の写真) 『東シベリアとモンゴルへの旅 (1878–1879)』がある¹⁴⁾。

軍人で諜報官を務めたラコステ (Émile Antoine Henry de Bouillane de Lacoste / 1867–1937) は、1899–1900 年に同じく諜報軍人のエンセルメ (Hippolyte Enseleme) とともに満州を旅行した。モンゴル旅行では、考古学的遺跡を訪問し、ウイグル可汗国の都城跡カラバルガスンにあったソグド語碑文の *estampage* (厚紙に押し当てたもの) 拓本を持ち帰った (Bouillane de Lacoste 1910: 66)。97 点の写真から成るアルバム (Bouillane de Lacoste 1909) が所蔵され、公開されている¹⁵⁾。ラコステの写真は、2012 年に後述するアルバール・カーン美術館で開催された展示会で用いられ、2016 年にウランバートルでも展示された。

Molteni と記されているガラス・ネガティブ (10 × 8.5cm) 10 件約 30 点がある。この名称はガラス乾板を製造していた会社名である。例えば、シャファンジョン (Jean Chaffanjon / 1854–1913) が 1894–1896 年の中央アジア・シベリアへの調査旅 (Chaffanjon 1898) についてパリ地理学会 (フランスの地理学協会のこと) で講演をした際に利用したものもある (写真 6)。

この事例のように、ここで保管・整備されている地図や写真の多くは、パリ地理学会から委託されたものである。同会はいまも存続しており、保有権を有しているが、閲覧提供など一切の業務は国立図書館に委ねられている。これらの写真は、EU の文化資産デジタルプラットフォーム Europeana に搭載されている¹⁶⁾。

なお、ポール・ペリオ (Paul Pelliot / 1878–1945) によって招来された資料のうち、写真については、ギメ東洋美術館から国立図書館に移管されたばかりで、まだ整理されていない。

モンゴルに関する最初のカラー写真は、カーン (Albert Kahn / 1860–1940) のプロジェクトによるものである。カーンはユダヤ系フランス人で南アフリカにおける金およびダイヤモンドの採掘事業に成功し、1898 年に銀行を設立した。また



写真 6 相撲をとる男たち（J. Chaffanjon が 1897 年にパリ地理学協会で講演した時に用いた写真。フランス国立図書館総合カタログからの検索より。
<https://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb45036852p>）

1908 年から 1930 年にかけて世界中に写真家を派遣して「地球映像資料館」を作ることに私財を投じた。同館は現在、アルベール・カーン美術館として維持されており、隈研吾のデザインにより 2017 年に再開する予定であったが、2019 年 7 月の調査時点で工事中のために閉鎖していた。ホームページから世界中で撮影された写真を地図上から検索できるようになっており、モンゴル高原での資料は 142 点、現在のモンゴル国については 119 点、ブリヤートについて 23 点、前者のうち国境付近キャフタでの写真が 21 点あり、これらすべてを小さいながらもオンラインで確認することができる¹⁷⁾。いずれもアルベール・カーンに派遣されたカメラマンのパス（Stéphane F.M. Passet / 1875–1941）が 1913 年に撮影したものである。

4.3 フィンランドからの学術調査隊

ヨーロッパにおける諸言語のなかでも、ウラル語族に属するフィンランド語ならびにハンガリー語（マジャール語）は異質であると自他ともに認識されていたため、フィンランドとハンガリーは、言語学的関心から、東方に対する学術調査を推進した（Aalto 1971; Tiitta 2009; Janhunen 2012）ことは、すでに報告したので（小長谷 2020）、ここではごく簡単に要点を記すにとどめる。

まず、カストレン (Matthias Alexander Castrén / 1813–1852) が、ウラル山脈を越えて東シベリア探検 (1841–1844) および西シベリア探検 (1845–1848) に赴いたが、写真技術が開発されてまもない時期であり、同探検に関わる映像記録はない。彼は、ウラル語族のサモエド諸語とアルタイ諸語は近縁であり、その原郷がアルタイ山脈・サヤン山脈であったという仮説を提唱した。

次に、ドンネル (Otto Donner / 1835–1909) が、フィン・ウゴル協会を創設し、この仮説を検証する調査を企画し、資金を準備してラムステッド (Gustaf John Ramstedt / 1873–1950) をモンゴル方面へ派遣した。

ラムステッドの学術調査は『七回の東方旅行』(Ramstedt 1944; ラムステッド 1992) と題する一般書にまとめられている。彼は、1898 年にウルガまでカメラを 2 台持参し、うち 1 台は、ロシア商人スミルノフ (スミルノフ商会) により活仏 (ジェブツンダンパ・ホトクト 8 世) に売却された (ラムステッド 1992: 59)。このカメラによって、モンゴル人による最初の写真撮影が行われた。一方、ラムステッド自身の撮影による写真は他の調査記録とともに、モスクワへの運輸途上で失われた (ラムステッド 1992: 110)。

1909 年の探検時には、考古学者のバルシ (Sakari Lemmitty Päläsi / 1882–1965) が同行し、写真撮影はもっぱらバルシが担当した (ラムステッド 1992: 205)。バルシによる写真は約 2,000 点にのぼり、そのうち 263 点が生誕 100 年を記念する論集で公刊されている (Halén 1982)。同書には、バルシが考古学者としてアルハンガイ県イフ・タミル河畔の岩絵を調査した際の写真 84 点と、収集した民族衣装などの標本資料の写真 30 点が含まれている。

バルシによる写真はガラス・ネガティブとともに国立フィンランド博物館写真アーカイブズ部門に移管されている。同博物館の HP で閲覧できるのは 396 点で、フィンランド国内の写真も多く、モンゴル関係は 102 点にとどまる¹⁸⁾。その大半がバルシ自身の著作『モンゴルへの旅』(Päläsi 1911) などに掲載された写真で、1 点ごとに書誌情報が付されている。こうした情報はフィン・ウゴル協会の整理によるものであり、とくに文献学者 H. T. Halén の手による。

同博物館にはまた、ラムステッドのカムイクやアフガニスタンで撮影した写真も数百点保管されている。

上述のドンネル自身は探検を行わなかったが、息子のカイ (Kai Donner / 1888–

1935) は東シベリアへの学術調査を実施し、その記録は、その息子の Joakim Donner とヘルシンキ大学東アジア学研究室の言語学者 J. Janhunen によりまとめられ英文書籍が刊行されている (Donner and Janhunen 2014)。

言語学的関心と並んで、地理学的・地質学的関心による東方への学術調査が進んだ。地理学者グラノ (Johannes Gabriel Granö / 1882-1956) は、1909年、ラムステッドやパルシとハンガイ山地で遭遇している (ラムステッド 1992: 230)。グラノの撮影した写真コレクションのごく一部がフィンランド文学協会に寄贈され、ロシア人考古学者 A. A. Kovalev により整理されて、2002年に展示『The Blue Altai』が行われた際に用いられた。また、グラノの著書 (Granö 1919-1921) は、ガラス・ネガティブを利用して再版され (Granö 1993)、ガラス・ネガティブの画像記録としての精密さが証明された。

1917年、フィンランドのスウェーデン系鉱物資源開発会社はトゥバにヘイレル (Axel Oltai Heilel / 1851-1924) らを派遣し、試掘した際の写真についてはトゥバ出身の若手研究者 V. Peemot により、2016年に展示で紹介された¹⁹⁾。

1944年から1946年までフィンランド大統領を務めたマンネルハイム (Carl Gustaf Emil Mannerheim / 1867-1951) は、ロシア軍参謀本部の命を受けて、軍人としてポール・ペリオの文献学的探検に同行する名目で、清の情勢を探るために、1906年から1908年まで中国へ派された (石濱 2016)。大部の日記3巻 (Mannerheim 2010) と調査記録 (Mannerheim 2013) が英語でも刊行されており (Mannerheim 2008)、中国語にも翻訳されている (馬達漢 2009)。また、評伝も多い (植村 1992 など)。写真については、上述のアーカイブズで保管されている約1,400点のうち、HP上で確認する限り、現在の中国内で撮影されたものは529点にのぼる²⁰⁾。また、フィンランド国立公文書館にはごく一部の私的な紙焼き写真しかないことを確認した。

4.4 ハンガリーからの学術調査隊

ヨーロッパの言語の中で、ハンガリー語 (マジャール語) は、フィンランド諸語と同様にウラル語系に属し、とくに西シベリアのハンティ語やマンシ語などのオビ・ウゴル諸語と密接な関係があると指摘されている (Honti 1979)。ハンガリー語とウゴル語の関係は19世紀に証明された (Budenz 1879) にもかかわらず、ヴァ

ムベリー（Ármin Vámbéry / 1832–1913）の影響を受けて、ツラニズム（汎ツラン主義）すなわち中央アジアを起源とすると想定されている諸民族の文化的一体性を強調する思想を支持する研究者がいた。

ツラニズムの支持者の 1 人が言語学者のガボール（Bálint Gábor / 1844–1913）である。彼は、ハンガリーにおけるモンゴル語研究の嚆矢である。1871 年にアストラハンを訪問し、カルムイク（オイラート）方言を研究し（Nagy 1959）、1873 年から 1875 年のあいだ、イルクーツクからイフ・フレ（ウランバートル）まで至り、ハルハ方言についても調査した（Birtalan 2016）。ただし、彼の調査行に関する写真記録はない。

モンゴル語研究をハンガリーで本格化させたのはリゲティ（Lajos (Louis) Ligeti / 1902–1987）である。彼は 1925 年から 1927 年までパリでポール・ペリオのもとで学んだ。1928 年から 31 年まで中国に滞在し、その間、内モンゴルのドロンノール地方とバルガ地方でチャハル方言、ハルチン方言、ダウル方言を調査した（Ligeti 1933）。ドロンノールでの調査について一般書 *Sárga istenek, Sárga emberek* “Yellow Gods, Yellow People” で紹介している（Ligeti 1934）。1936–1937 年はアフガニスタンでモゴール族の調査を行った。きわめて残念なことに、著作権法により、彼の死後 50 年すなわち 2037 年まで、調査資料の利用が禁じられている。

リゲティは 1942 年、ブダペストにあるエトヴェシュ・ロラード大学に中央アジア学科を設立した。彼のもとで、ディエスギ（Vilmos Diószegi / 1923–1972）、コハルミ（Katalin Köhalmi / 1926–2012）、ラヨス（Bese (Ligeti) Lajos / 1926–1988）、ロナタス（András Róna-Tas / 1931–）、カラ（György Kara / 1935–）などの著名な文献学者が育った。1956 年、モンゴルのリンチェン（Yenshööbü ovogt Byambyn Rinchen / 1905–1977）がリゲティのもとで博士号を取得すると、帰国後、直ちにハンガリーの研究者たちを招聘した。「ハンガリー動乱」後に、ソ連からハンガリー研究者に対してモンゴル調査の許可が出された。そして、1957 年、モンゴル人民共和国への最初の学術調査団が派遣され、コハルミ（ハムニガン研究）、ロナ・タス（チベット学）、当時まだ学生だったカラ（文献学）が加わった。この調査行について、ロナ・タスは *Nomádok nyomában* “tracing Nomads”（Róna-Tas 1961）を書き、そこには若干の写真が含まれている（Sárközi and Birtalan 1997）。

同年、ディエスギも許可を得てイルクーツクを訪問し、さらに 1960 年リンチェ

ンと共に東部のブリヤート、北部のダルハドとウリヤンハイ、中央部のホトゴイドなどの集団を調査した。その調査資料は近年整理されている (Somfai 2008; Birtalan 2020: 88-97)。

以上のように、ハンガリーでは早くから東方への関心があったものの、上述の1873年のガボールを除いてモンゴルへの学術調査は比較的遅く、社会主義時代の資料として有益である。

中央アジアへの関心を学術調査行として実現したのはスタイン (Sir Auriel Stein / 1862-1943) である。彼の第3回の調査行 (1913-1916) で、1914年にカラホトを訪れた。彼はイギリスに帰化し、イギリス王立地理学協会から金メダルを受けている。すべての調査資料も大英博物館に所蔵されている (Wang and Perkins 2008)。

4.5 スウェーデンからの学術調査隊および宣教団

19世紀末から20世紀初頭にかけてモンゴルへやってきたさまざまな調査隊を語るうえで欠かせないのがラーソン (Frans Augus Larson / 1870-1957) である。彼は、プロテスタント福音派の牧師として1893年に23歳で中国を訪問し、オールドスでモンゴル語を習得したのち、ウランバートルで1年暮らし、それから張家口北郊に住んだ。義和団の乱から逃れるため、1900年にシベリアへ行き、しばらくキャフタで金鉱開発会社などの通訳を務めた。1902年から再び内モンゴルのアドーチン旗チャガン・フレー・スム (現在のシリングル盟黄旗) に定住し、聖書販売を目的にウルガまでしばしば移動した。1917年、アンダーソン・メイヤー商社を共同で立ち上げ、1922年には単独で企業を設立し、モンゴル馬の輸出やドッジ車による運輸を開始した。これにより、それまで1ヶ月かかったキャラバン・ルートを4日間に縮めた。また、第8世活仏ジェブツンダンバ (ボグド・ハーン) にフォード車を提供した (後述)。ラーソンはボグド・ハーンから公爵の位を授けられ、それが著書のタイトルになっている (Larson 1930; ラルソン 1939)。

ほぼ半世紀モンゴルに滞在していた間、同郷のヘディンのみならず、ロシアのコズロフ、デンマークのハズルンド (後述)、アメリカのキャンベル、アンドリュース (後述) など多くの調査行を支援したことが了解される。このため、彼らの撮った写真には必ずと言ってよいほど、ラーソンが登場する。時代はやや下って、世界で初めて毛沢東に取材したことで有名な、スイス人の写真ジャーナリストのボ

シャル（Waler Bosshard / 1892–1975）が、1934–1936 年、内モンゴルを旅した際の旅行記においても、掲載された 71 点の写真のなかにラーソンを撮影した写真 2 点が含まれる（Bosshard 1938: 48）²¹⁾。

ヘディン（Sven Hedin / 1865–1952）はとりわけラーソンの協力を大いに享受した。彼の中央アジアへの探検は 1886 年、1890–1891 年、1893–1897 年、1899–1902 年、1906–1908 年、1916 年、1927–1928 年、1929–1930 年、1933–1935 年の合計 9 回にのぼる。これらの探検のうち、とくにモンゴル高原に関係するのは、1894 年から 1897 年にかけてウラル山脈を越えて北京まで至る調査と、中国と合同の西北科学考查団による 3 度の調査である。ヘディン財団が設立されており、2022 年までその著作権を保有しており、ほとんどの資料とりわけ 1929–1933 年の資料は、ストックホルム郊外にある国立民族学博物館に寄託されている。民族学を担当したヨースタ・モンテル（Karl Gösta Montell / 1899–1975）の撮影したものも含めて、ガラス・ネガティブは 5,000 点ほどあると思われる。

ヘディンの写真コレクションの特筆すべき点は、写真についての情報が、実弟によってスウェーデン語（タイプライターによって清書されている）でリスト化されており、時系列で並べられていることである。現在もその番号と写真が照合可能である。また、各写真がどの出版物に使用されたかということも、そのリストに記載されている。したがって、場所の特定など、写真についての情報が撮影者（とそれに近い人物）によってきわめて豊富に残されている。ただし、このリストは未刊行で、一部しかなく、ヘディン財団の H. Wahlquist 氏によって管理されている。

そもそも、ラーソンが中国・モンゴルへ赴いたのは、スウェーデン系アメリカ人のフランソン（Fredric Franson / 1852–1908）が、1890 年にシカゴで TEAM（The Evangelical Alliance Mission）を創設し、中国、モンゴル、日本、インド、南アフリカ、南アメリカへ宣教師を派遣する事業を展開したからである。スウェーデンからモンゴルへの宣教団（スウェーデン・モンゴル・ミッションを以下、SMM と略す）は 1898 年に始まり、最初の拠点は 1908 年にハローン・オス（現在の中国内モンゴル自治区ウランチャブ盟化徳県朝陽郷新圪子村）に創設され、1919 年にウルガに創設された（バイカル 2019）。1924 年以降、活動は南モンゴルに限定され、1949 年まで続いた。1950 年にミッションは日本へ移動し、以来、スウェーデン福音教会と呼ばれている。SMM のアーカイブには 1898 年以來の報告書や手紙

が保管されている。

スウェーデンでは、2013年よりウプサラ大学図書館がウェブサイトで一種の写真展を伴って写真資料の公開が開始された (Wahlquist 2016)。現在では、ほぼ全ての写真 1,385 点が高解像度でインターネット上に公開されている²²⁾。

これらの写真資料はいずれもエリクソン (Erik Joel Eriksson / 1890-1987) が 1985 年に寄贈したものである。彼は、イギリスで医学を学び、1913年に SMM として派遣された (Ollén and Eriksson 1943)。1918年、張家口で結婚し、1938年から1947年まで SMM のリーダーを務めた。写真は、1914年から1938年までのあいだ、ハローンオス滞在中に撮影されたものである。ウプサラ大学ではテーマごとに階層化されており、その構成は提示されている順に以下の通りである。

考古学 28 / 入植者 38 / 人物 88 / 民族誌：牧畜 91 / ミッション業務 270 / 民族誌：スポーツ・ゲーム 28 / ラマ教・シャマニズム 99 / 景観と都市 138 / 民族誌：人物 27 / 民族誌：音楽 6 / 民族誌：祭日 20 / 人物 98 / 民族誌：住居 48 / 翻訳・印刷 37 / 民族誌：交通運輸 48 / 王子と彼らの環境 / 民族誌：衣装・宝飾 98 / 出張 108 / 民族誌：農耕作業 47

ウプサラ大学図書館では、朝鮮語を専門とする学士院の Staffan Rosen 氏が、同写真の整理に当たっている。すでに視力を失っていたエリクソン本人から解説が聞き取られており、そうした情報が今後、加えられて公開されるものと期待される。

4.6 その他の国々からの学術調査隊

4.6.1 デンマーク

ハズルンド・クリステンセン (Henning Haslund-Christensen / 1896-1948) のモンゴル調査行は『外蒙の赤色地帯』(Haslund-Christensen 1934; ハズルンド 1942)、『蒙古の人と神』(Haslund-Christensen 1935; ハズルンド 1939; ハズルンド 1942 は同書改題『蒙古の旅』) でよく知られてきた。ハズルンドのコレクションは写真を含めてデンマークの国立博物館において、近年、整理されて資料集としてまとめられた (Braae 2017)。

ハズルンドは 1923 年、カリスマ的な医師クレブス (Carl Immanuel Krebs / 1889-1971) のもと、フブスグル湖周辺、現在のエルデネボルガン郡に酪農場を建設し、毛皮交易をするという開拓団に加わった。その著書 (Krebs 1937) にある写真も上述の資料集で一部確認することができる。革命政権の成立により、1925年にモ

ンゴルから追放された後は、北京に滞在しながら、モンゴルへの関心を持ち続け、スウェン・ヘディンの調査隊（1927-1930）に加わる。ヘディン隊では、キャラバンを指揮するとともに、民族学とりわけ民族音楽の資料収集を担当した（Haslund-Christensen 1943）。また、デンマーク独自の調査隊を組織し、1936年から1937年には東モンゴルに、戦後、1948年にはアフガニスタンへ赴き、そこで客死したため、カーブルにあるスタインの眠る墓地に埋葬された。

同資料集にはスカンジナビア諸国からの探検家の章が設けられている。なかでも、同博物館に所蔵されている貴重な写真資料として、デンマークの通信会社 The Great Northern Telegraph Company「大北電信会社」の技術者たちの写真が含まれている。K. P. Albertsen や E. A. Steffan は 1899 年に設置された電線の点検整備のために 1922 年にウルガを訪問した（Albertsen 1921）。

4.6.2 ノルウェー

スウェーデン出自のアメリカ人女性リンドグレーン（Ethel John Lindgren / 1905-1988）は、銀行家の父とともに一家で北京に暮らし、モンゴルに興味を持つようになった。英国ケンブリッジ大学で中国語を学び、1928年にウランバートルを訪れた。当時は、極左路線により、ラーソンなどソビエト以外の外国人が追放されるなか、英米タバコ会社に勤務するノルウェー人マーメン（Oscar Mamen）と出会って結婚した。彼女はモンゴルでの体験から、友人知人に害が及ぶことを恐れて、生前、資料の公開を禁じていたため、あまり知られてこなかった。1992年になってようやく彼女の息子が、リンドグレーンの1929-1932年の大興安嶺などの調査のフィールドノートと、カメラマンをつとめた夫マーメンの写真およそ10,000点をケンブリッジ大学に寄贈した。写真の一部はケンブリッジ大学のU.E. Bulag教授によって現地コミュニティに提供され、新たな交流の契機となった²³⁾。またノルウェー国立博物館にもマーメンが1912年に収集した標本資料が残されている。2020年に展示された²⁴⁾。

4.6.3 アメリカ

アメリカの国立自然史博物館はモンゴル国に1922年、1923年、1925年の3回、内モンゴルに1928年、1930年の2回、調査隊を派遣した。調査隊長は、ドラゴ

ンハンターとして知られ、映画インディアン・ジョーンズのモデルとなった博物学者のアンドリュース (Roy Chapman Andrews / 1884-1960) である。彼の多くの著書のうちモンゴル関係は 1918-1919 年の標本資料収集の旅を記録した “Across Mongolian Plains” (Andrews 1921) と “On the Trail of Ancient Man” (Andrews 1926) であり、前者には 39 点、後者には 60 点の写真が使われている。これらの写真は妻 Yvette Borup が撮影した。学際的な多くの調査隊メンバーたちによる写真とともに、同博物館で整理され、その一部はオンラインで公開されている²⁵⁾。1918-1919 年の予備調査時のウルガの写真や 1930 年代のカラー写真も含まれている。

アンドリュースに先立って、外交官のロックヒル (William Woodville Rockhill / 1854-1914) は、チベットやモンゴルを訪問し、“The Land of the Lamas, Notes of a Journey through China, Mongolia and Tibet” (Rockhill 1891) や “Diary of a Journey through Mongolia and Tibet in 1891 and 1892” (Rockhill 1894) を刊行して、イギリス王立地理学協会から金メダルを受けた。残念ながら、前者に写真は無く、後者の写真はおそらくチベットである。

ポーランドのクラクフにある国立科学文書館には、コトヴィッチ (Władysław Kotwicz / 1872-1944) の調査資料が残されている。彼は、1894 年、1897 年、1910 年、1917 年とカルムイクへ調査し、モンゴルへは 1912 年にオルホン渓谷の調査を行った。とりわけエルデネゾー寺院に関する写真を多く含む資料集が刊行され、広く利用されている (Tulisow et al. 2012)。

5 一般旅行者などによる写真記録

アメリカ人ケナン (George Kennan / 1845-1924) は、1864 年、ロシア・アメリカ電報社に勤務し、電報線を設置するための事前調査を行い、シベリアの事情に詳しくなった。1878 年に AP 通信に職を得ると、ジャーナリストとして 1885 年にシベリアを横断する際、モンゴルを訪れた。彼の資料 George Kennan Papers はアメリカ議会図書館からオンラインで提供されており、その中に買売城 (複数の買売城のうち、おそらく現在の、ロシア国境に付近にあるアルタンボラグ) と思われる写真が 7 点認められる²⁶⁾。

ドイツ人コンステン (Hermann Josef Theodor Consten / 1878-1957) は、ロシアの

密命により 1907-1913 年、モンゴルに滞在し、革命期の激動をウランバートル、ホブド、ウリヤスタイで体験し、ロシア帝立地理学協会の会員となった。彼は、第一次世界大戦直前にモスクワ経由でドイツに帰国しており、1914 年トルコ、1918 年ハンガリーで諜報活動に従事した。その後、1928 年、再びモンゴルへ入る際に拘束され、1929 年に解放されてから 1950 年まで北京に滞在した。『ハルハ帝国のモンゴル人の牧草地』2 卷 (Consten 1919 / 1920) は多くの写真を含む。3,000 点以上に及ぶ白黒写真は、自然から人文・社会現象まで幅広く、近年、写真集にまとめられた (Götting 2005)。2005 年にケルンで、翌 2006 年、ドイツ・モンゴル協会が 100 点を選定し、在ウランバートルのドイツ大使館で展示され、モンゴルに寄贈された。ドイツのハイデルベルグやシュタットガルトで開催されたモンゴル歴史に関する展覧会ではコンステンの写真がかなり用いられている。

アイルランド人ペリー・アスキュー (Henry George Charles Perry-Ayscough / 1875-1915) は上海で、民国期の中華郵政に勤務しており、北京で知己を得たロシア大使コロストウエッツ (Ivan Jakovlevich Korostovetz / 1862-1933) の招きを受けて、1913 年、休暇を利用してモンゴルを訪問した。その旅行記にはコロストウエッツやオーストラリア出身のジャーナリストのモリソン (George Ernest Morrison / 1862-1920) の提供した写真など 50 余点が掲載されている (Perry-Ayscough, H. G. and H. G. Otter 1913)。コロストウエッツ自身の著作にも駅舎やゾーンモドの金採掘など貴重な写真が含まれている (Korostovets 1926; コロストウエッツ 1937)。

オーストリアからはレーダー (Hans Leder / 1843-1921) が、1891-1892 年、昆虫の研究のために、現在のボルガン県およびウブスハンガイ県を旅行し、モンゴル文化に魅せられてとりわけエルデネゾー寺院で文物の収集にあたり、ヨーロッパにおけるモンゴル研究に貢献した (Lang and Bauer 2013)。ただし、1899-1900 年、1902 年、1904-1905 年と何度も旅をしているが、モンゴルの写真はエルデネゾーの 2 点しかない (Lang and Bauer 2013: 10)。

1912 年、ラーソンによる営業の結果、ボグド・ハーンにフォード車を届けるために天津から走行してきたルミニオン (Ethan C. Le Munyon) はモンゴルでの写真 34 点とともに原稿を The National Geographic Magazine に寄稿している (Le Munyon 1913)²⁷⁾。

1920 年代、モンゴルは外国から技術的援助を受けるようになり、来訪した専門家たちが写真を残している。ドイツからは、1920 年、農業エンジニアのモンテト

ン (Digeon von Monteton) がモンゴルへのトラクターの導入を果たした。農作業にトラクターを利用している様子のほか、歴史的人物や寺院など 720 点ほどの写真を残しているという。そのうち 150 点ほどはボン大学の Hans Roth によって整理されているが、公開されていない。

第一次世界大戦 (1914-1918 年) の時、ハンガリーはオーストリア・ハンガリー帝国としてドイツ側に与し、ロシア軍と戦った。そのため、ロシア軍の捕虜となってシベリアへ送られ、モンゴルを経由してハンガリーに帰国した人びとのなかにはモンゴルの写真も残している (Teleki 2001: 110-112)。テレキによる紹介をまとめると以下ようになる。

ゲレタ (József Geleta / 1895-1965) は、第一次世界大戦時に士官であり、捕虜としてシベリアのミヌシンスクへ送られた。十月革命や赤軍には加わず、逃走して、1920 年、ウンゲルン将軍よりも先にウルガに到着し、中国側に協力した。キャフタで結婚し、ウンゲルン将軍の死後、ウルガに戻り、電気技師として働いた。1929 年に家族とともにハンガリーに帰国し、その後、フォーバス (László Forbáth) に語った回想がハンガリー語と英語で刊行された (Forbáth 1934; Forbath 1936; フォーバス 1938)。

フォーバスによれば、ゲレタは機密人物であり、首都に第 1 電気発電所の設計を始め、国会議事堂 (後に劇場になる「緑の丸屋根」) ほか建築物の設計に携わった。当時の首都サイズは、わずか 48 平方キロメートルで、人口は 80,000 人であった。写真は同上書にはおよそ 100 点 (英訳本には 46 点、邦訳本には 52 点) があり、革命期という点で時代的に希少価値がある。

また、ラドノティ・ロス (Andor Radnóti-Róth / 1893-1964) は、ブダペスト大学の医学生で 1914 年に入隊し、ロシア軍に捕捉されて、ヴェルフネディンスク (現在のウランウデ) の病院で医師として勤務した。1922 年にモンゴルを訪問し、ジャムツァラノ、ダムバドルジ、スフバートルなどモンゴルの革命家たちの医師を務め、スフバートルの臨終を確認した。チョイジンラマ寺院の写真など 66 点がハンガリー国立博物館に保管されており、1958 年および 1962 年にウランバートルを再訪した際、モンゴルにも寄贈された。

欧米からの中央アジア、モンゴルへの旅行者一覧を作成しようとしていた言語学者 J. R. Kruger は、1911 年に雲南からバイカル湖まで北上した旅行作家のケン

ドール (Elizabeth Kimball Kendall / 1855–1952), 1921–1922 年に張家口からウランウデまで北上した旅行作家のフランク (Harry Alverson Franck / 1881–1962), チベット学者で画家のレーリッヒ (Nikolai Konstantinovich Roerich / 1874–1947) や京津タイムズ記者だったラティモア (Owen Lattimore / 1900–1989) などに言及している (Kruger 1982)。彼らの著書に利用されている写真等の原板の所在については現在、調査中である。

6 さいごに

19 世紀から 20 世紀にかけて、ユーラシア内陸部へ東西から多くのエクスペディションが派遣された。イギリスによるインドの植民地支配が展開し、南下するロシアとの間で「グレートゲーム」と呼ばれる政治的な関心が高まるとともに、現地からの文献学および考古学に関する情報が刺激となって学術的な関心も同時に高まったからである。本稿では、それらのエクスペディションのうち、モンゴルに至った調査を取り上げ、さらにその調査隊による写真資料について、報告書における掲載、写真資料の所在と整理状況等をまとめた。以下のような特徴を指摘することができる。

ロシアは多くのエクスペディションを派遣し、その資料を複数の研究機関で保管している。帝国時代は「メシアニズム」を背景に、ロシア地理学協会が母体となり、シベリアに流刑されていた知識人たちの現地研究を活用しながら、総合的な調査が行われた。

野生馬の発見で有名なプルジェワルスキーによるエクスペディションの時点では写真はほぼない。死の町カラホトの発見で有名なコズロフは、その後、整理できないほど多くの写真を撮影した。これら兩名のあいだのポターニンやポズドネーエフらのエクスペディションの時点での写真は、現地在住の知識人たちが写真技術者として撮影したものである。その意味では、地元の人たちによる写真撮影であったとも言える。

社会主義時代になるとソ連科学アカデミーが多くのエクスペディションを派遣して、モンゴル科学アカデミーの形成に寄与する。ただし、初期のシムコフやポロフからはスターリン粛清の難を免れなかったため、近年になって改めて資料が

再発見された。

スカンジナビア諸国からのエクスペディションは文化的遺産として整理が進んでいる。とりわけ、フィンランドやハンガリーはルーツ探しという観点から言語学的研究を切り口に調査研究が行われた。彼らの調査遂行にあたって、現地に在住する宣教師が支援した。また、電信会社技師、開拓者、捕虜など多様な来訪者の記録は、1920年代の激動期を捉えているという点で貴重である。

英仏独からは、スタイン、ペリオ、ルコックなど中央アジアの文献学や考古学の始祖たちが輩出されたが、モンゴルへ関心を北進させたのは、むしろ北京や天津で勤務していた人々である。

以上のように、写真コレクションは、それぞれの特徴を持っている。言い換えれば、写真コレクションはそれぞれのコンテクスト（文脈）を持っている。こうした特徴を踏まえたうえで、コレクションを横断した比較分析を行うことができるだろう。例えば、独特の住居として意図的に撮影されてきた「天幕」や、写真に偶然にも写り込んだ「イヌ」や、想像以上に多く写っている「丸太」などに焦点をあてて、理解を促進するための参照としての写真ではなく、写真そのものを出発点とする新たな研究が可能になると期待される。

謝 辞

本研究は、JSPS 科学研究費 JP17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」（2017-2022）の助成を受けたものである。本稿には、研究分担者によるそれぞれの研究活動ならびに海外での調査結果を反映させている。

2017年12月、調査地のヘルシンキでは、当時、現地にサバティカルのため滞在中であった桜美林大学のバイカル教授を始め、ヘルシンキ大学ヤンフネン教授、同ハレン名誉教授、同大学に留学中のトゥバ人ピーモットさん、北海道大学ヘルシンキオフィスの岡部越大さん、フィンランド国立博物館のヴァイノネンさんならびにオナツさん、文学協会のマキエラさんのご協力を賜った。

2018年12月、調査地のストックホルムおよびウプサラでは、ヘディン財団のヴォルケストさん、スウェーデン大学院のローゼンさんにご教示を賜った。また、サンクトペテルブルグでは、ロシア科学アカデミーのユスポヴァさんにひとかたならぬお世話になった。また、コズロフ博物館のスタヌレヴィッチさん、クンストカメラのイワノフさん、RGOのマトヴェエワさんにもご協力を賜った。

2019年4月、国際モンゴル学会がブダペストで開催された際、ハンガリーについては、国際モ

ンゴル学会会長のビルタラン教授にご教示を賜った。また、当時、国立民族学博物館に客員教授として来館していたソムファイ先生にもご協力を仰いだ。

2019年7月、ロンドンでは、数十年来、旅行記類の調査を継続しているスー・バーンさんに多大なご尽力を賜った。パリでは、フランス国立図書館地図部門のネッチネさんと同部門で写真を担当しているロワゾーさんに親切に説明していただいた。また、CNRSのシャルルーさん、パリ第10大学（ナンテル）のドゥラプラスさんにもご協力いただいた。

2019年11月、コペンハーゲンでは、ブラーエさんに多大なるご尽力を賜った。

また、ポーランドについては、研究分担者の鳥根県立大学井上治教授を介して、ワルシャワ大学パレヤ・スタジンスカ教授ならびにクラクフ・アーカイブのミハレビッツさんに惜しみない協力をいただいている。

さらにモンゴル科学アカデミー歴史学研究所長のチョローンさん、モンゴル独立博物館準備室のパーサンジャルガルさん、国際モンゴル学会事務局のクリスティーナ・テレキさんにも日頃から協力を得ている。

以上、記して感謝するとともに、調査や研究会等を通じてご協力くださったすべてのかたがたに深く感謝する。

注

(以下の URL はすべて 2020 年 9 月 30 日にアクセスした。)

- 1) この国際共同研究の成果は、下記のホームページで公開している。本稿が刊行されたのちは、その英訳も同ウェブサイトに掲載する予定である。<https://historicismages.mn>
- 2) 世界デジタル図書館から、1874年に撮影されたボグド宮殿の写真。
<https://www.wdl.org/en/item/2128/#q=hutuhta&qia=en>
- 3) アメリカ議会図書館からのオンラインで、Laninによる撮影写真は、155枚が公開されているが、買売城の写真は見当たらない。<https://www.loc.gov/search/?fa=contributor:lanin,+v.+v.&sp=2>
- 4) 2017年11月の国際共同研究会における発表による。
https://historicismages.mn/sites/default/files/2020-04/Matveeva%20report_1.pdf
- 5) アメリカ議会図書館からのオンラインで、1899年に撮影されたポターニンの大興安嶺調査の写真の一部が公開されている。<https://www.loc.gov/photos/?q=potanim>
- 6) 資料の所蔵元では当該書籍がオンラインで提供されている。
http://www.archeo.ru/izdaniya-1/vagnejshije-izdaniya/pdf/Medvedeva_Culuun2017.pdf/view
- 7) <http://doc20vek.ru/node/2418>
- 8) 郷土史家のセルゲーフによる伝記のうち、モンゴルの写真撮影に関する部分は英訳しておいた。https://historicismages.mn/sites/default/files/2020-07/V.%20D.%20Sergeev%202001%2C%20Charushin_1.pdf
- 9) アメリカ議会図書館からオンラインで、1878年に撮影されたチャルーシンらのコレクション71点が公開されている。<https://www.loc.gov/search/?fa=partof:russian-chinese+cross-border+trade>
- 10) 同展示会のカタログは以下の通り。
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015013007870&view=1up&seq=32>
- 11) SOASに保管されているロンドン伝道協会の資料リストは以下の通り。
<https://digital.soas.ac.uk/content/AA/00/00/08/85/00001/LMS.pdf>
- 12) 検索用のアーカイブ・カタログは以下の通り。
<http://archives.soas.ac.uk/CalmView/Record.aspx?src=CalmView.Catalog&id=CWM&pos=1>
- 13) 資料のカタログ検索は右記の通り。<https://catalogue.bnf.fr/>

例えば、モンゴル+地理学協会+写真で検索した結果は以下の通り、16件確認することができる。

https://catalogue.bnf.fr/changerPage.do?motRecherche=mongolie&listeAffinages=FacLocal_Lcl3BRdjToISGEMag%3BFacNatDoc_i&nbResultParPage=10&afficheRegroup=false&affinageActif=true&pageEnCours=1&nbPage=2&trouveDansFiltre=NoticePRO&triResultParPage=0&critereRecherche=0

- 14) <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10524070x.r=tumanov?rk=64378;0>
また、トゥマノフの同アルバムは動画としても提供されている。
<https://www.youtube.com/watch?v=eE1djoRXII0>
- 15) フランス国立図書館デジタルアーカイブのHPから見るブイヤン・ド・ラコステのアルバム。
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b105240861.r=Henri%20BOUILLANE%20de%20LACOSTE?rk=21459;2>
- 16) モンゴル関係の写真は138点ある。
<https://www.europeana.eu/en/search?page=1&view=grid&query=mongolia%20photograph>
- 17) <http://collections.albert-kahn.hauts-de-seine.fr/>
- 18) フィンランド国立博物館写真アーカイブズはフィンランド語で作成されている。以下は、ラムステッドの写真の検索結果の画面である。
[https://www.kuvakokoelmat.fi/pictures/search?hakuheito_1=tekija&hakusana_1=%22Pälsi+Sakari%22&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&operaattori_1=AND&hakuheito_2=aihe_paikka&hakusana_2=%22Mongolia%22&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&operaattori_2=AND&hakuheito_3=&hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3="](https://www.kuvakokoelmat.fi/pictures/search?hakuheito_1=tekija&hakusana_1=%22Pälsi+Sakari%22&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&operaattori_1=AND&hakuheito_2=aihe_paikka&hakusana_2=%22Mongolia%22&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&operaattori_2=AND&hakuheito_3=&hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=)
- 19) その時の記録はユーチューブで公開されている。
<https://www.youtube.com/watch?v=2dBjAjzMuY4>
- 20) フィンランド国立博物館写真アーカイブズのマンネルハイムの検索結果の画面。
[https://www.kuvakokoelmat.fi/pictures/search?hakuheito_1=tekija&hakusana_1=%22Mannerheim+Carl+Gustaf+Emil%22&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&operaattori_1=AND&hakuheito_2=aihe_paikka&hakusana_2=%22Kiina%22&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&operaattori_2=AND&hakuheito_3=&hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3="](https://www.kuvakokoelmat.fi/pictures/search?hakuheito_1=tekija&hakusana_1=%22Mannerheim+Carl+Gustaf+Emil%22&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&off_hakusana_1=&operaattori_1=AND&hakuheito_2=aihe_paikka&hakusana_2=%22Kiina%22&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&off_hakusana_2=&operaattori_2=AND&hakuheito_3=&hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=&off_hakusana_3=)
- 21) 1950年版には写真が111点に増えている。これらの写真の一部はスイスのアーカイブで見ることができる。毛沢東やガンディーへのインタビュー時の写真も搭載されている。
https://fss.e-pics.ethz.ch/index.jsp?category=522&r=1586256782857#1586256787538_0
- 22) エリクソン牧師からウプサラ大学に寄贈された写真。
<http://www.alvin-portal.org/alvin/view.jsf?pid=alvin-record%3A81400&dswid=-6871>
- 23) BBC オンラインニュース。
<https://www.bbc.com/news/uk-england-cambridgeshire-33202411>
- 24) モンツァメオンラインニュース。
<https://www.youtube.com/watch?v=9nSMtlqGthg>
- 25) アメリカ自然史博物館のサイトでアンドリュースの調査隊をデジタル検索した結果。
https://lbry-web-007.amnh.org/digital/search?query=Central+Asiatic+Expeditions+%281921-1930%29&query_type=keyword&submit_search=Search
- 26) <https://www.loc.gov/photos/?fa=location:mongolia&q=george+kennan+papers>
- 27) ナショナル・ジオグラフィック・マガジンのオンラインで35点の写真を確認することができる。紙面に掲載されている点数よりも1点多いのは、番号946820が番号60419と重複しているためであり、実際には掲載されている34点である。
<https://www.natgeoimagecollection.com/CS.aspx?VP3=SearchResult&VBID=2KWGFRBG8O634&SMLS=1&RW=1199&RH=762>

附表 1 調査隊写真コレクション

名前	出身	生没年	主要調査地	調査年 / 滞在年	報告書刊行年
Radde, G. I.	ロシア	1831-1903	南東シベリア	1856-1859	1862-1863
Przhevalsky, N. M.	ロシア	1839-1888	ウスリー河	1867-1869	1870
			ゴビ	1870-1873	1875-1876
			タリム盆地	1876-1877	1883
			青海	1879-1880	1888
			青海	1883-1885	1888
Potanin, G. N.	ロシア	1835-1920	西北モンゴル	1876-77/79-80	1883
			西北モンゴル	1884-86/92-93	1893
Adrianov, A. V.	ロシア	1854-1920	西北モンゴル	1876-1877	1879
Charushin, N. A.	ロシア	1851-1937	西北モンゴル	1875	1888
Yadrintsev, N. M.	ロシア	1842-1894	アルタイ	1878-1880	1882
			オルホン溪谷	1889	1890
Radlov, V. V.	ロシア	1837-1918	オルホン溪谷	1891	1892-1893
Klements, D. A.	ロシア	1847-1914	モンゴル	1891-1897	1897
Lushnikov, A. A.	ロシア	1872-1947	モンゴル	1894	1894
Mikhno, P. S.	ロシア	1867-1938	フブスグル湖	1902	1906
Pozdneev, A. M.	ロシア	1851-1920	西北モンゴル	1892-1893	1896-1898
Grum-Grshimailo, G. E.	ロシア	1860-1936	西北モンゴル	1903-1914	1914-1930
Kozlov, P. K.	ロシア	1863-1935	黄河源流	1899-1901	1905-1907
			黒水城	1907-1909	1923
			モンゴル	1923-1926	2018
Amsterdamskaya, L. A.	ロシア	1903-?	ヘンテイ	1927	1927
Kazakevich, V. A.	ロシア	1896-1937	ダリガンガ	1929	1929
Kozlova, E. V.	ロシア	1892-1975	ハンガイ	1929	1929
Ostrovetsky, K. L.	ロシア	1889-1928	モンゴル	1926-1927	1927
Poppe, N. N.	ロシア	1897-1991	モンゴル	1927	1927
Simukov, A. D.	ロシア	1902-1942	モンゴル	1923-1938	2007
Klyagina-Kondratyeva, M. I.	ロシア	1896-1971	ハンガイ	1926-1930	2013
Borovka, G. I.	ロシア	1894-1942	モンゴル	1925	2017
Kozin, S. A.	ロシア	1879-1956	モンゴル	1913-1917	1917
Maisky, I. M.	ロシア	1884-1975	ウランバートル	1918-1920	1921
Binsteed, G. C.	スコットランド	1885-1915	モンゴル	1912-1913	1913-1916
Gilmour, J.	イギリス	1843-1891	モンゴル	1870-1882	1883
Tumanov, S. B.	ロシア	1842-1890	東シベリア	1878-1879	1879
Lacoste, A. H.	フランス	1867-1937	モンゴル	1899-1900	1909/1910
Chaffanjon, J.	フランス	1854-1913	中央アジア	1894-1896	1898

小長谷 モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）

写真の有無	撮影者	写真資料所在	備考
×			Komarov Botanical Institute
×			
×			
×			
△			△は転用
○	Roborovsky	RGO	ロシア地理学協会
○	Adrianov	クンストカメラ	
○		RGO	
アルバム		クンストカメラ	
アルバム		クンストカメラ	
×			
×			
○		RGO	
○		クンストカメラ	
アルバム	Lushnikov	クンストカメラ	
○	Lushnikov	キャフタ博物館	
○	Fyodorov	RGO	
○		RGO	
○			
○		RGO/Kozlov Museum	
○			
アルバム		MPA	モンゴル写真アーカイブズ
アルバム		MPA	
アルバム		MPA	
アルバム		MPA	
アルバム		MPA	
○		MPA	
○		MPA	
○		IIMK	ロシア物質文化史研究所
アルバム		MPA	
×			
○		RGS	王立地理学協会
×		SOAS	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院
アルバム		フランス国立図書館	
アルバム		フランス国立図書館	
○		フランス国立図書館	

名前	出身	生没年	主要調査地	調査年 / 滞在年	報告書刊行年
Pellio, P. E.	フランス	1878-1945	中央アジア	1906-1909	1910/1920
Ramstedt, G. J.	フィンランド	1873-1950	モンゴル	1898	1944
			モンゴル	1909	1944
Pälsi, S. L.	フィンランド	1882-1965	モンゴル	1909	1911
Donner, Kai	フィンランド	1888-1935	東シベリア	1913-1914/1917	2014
Granö, J. G.	フィンランド	1882-1956	モンゴル	1909	1919-1921
Heilel, A. O.	フィンランド	1851-1924	トゥバ	1917	[2016]
Mannerheim, C. G. E	フィンランド	1867-1951	中央アジア	1906-1908	2008
Ligeti, L.	ハンガリー	1902-1987	南モンゴル	1928-1931	1933
			アフガニスタン	1936-1937	1934
Róna-Tas, A.	ハンガリー	1931-now	モンゴル	1957	1961
Diószegi, V.	ハンガリー	1923-1972	北モンゴル	1960	2008
Stein, S. A.	ハンガリー	1862-1943	中央アジア	1913-1916	1928
Larson, F. A.	スウェーデン	1870-1957	モンゴル	1893-1944	1930
Bosshard, W.	スイス	1892-1975	南モンゴル	1934-1936	1938
Hedin, S.	スウェーデン	1865-1952	中央アジア	1894-1897	1900
Montell, K. G.	スウェーデン	1899-1975	モンゴル	1927-1935	1938
Eriksson, E. J.	スウェーデン	1890-1987	南モンゴル	1913-1938	1918-1938
Haslund-Christensen, H.	デンマーク	1896-1948	モンゴル	1923-1948	1934/1935
Krebs, C. I	デンマーク	1889-1971	フスグル湖	1923-1925	1937
Albertsen, K. P.	デンマーク	?-?	ウランバートル	1922	2017
Lindgren, E. J.	ノルウェー	1905-1988	大興安嶺	1929-1932	[2020]
Andrews, R. C.	アメリカ	1884-1960	モンゴル	1922/1923/1925	1926
Rockhill, W. W.	アメリカ	1854-1914	チベット	1891-1892	1894
Kotwicz, W.	ポーランド	1872-1944	オルホン溪谷	1912	2012
Kennan, G.	アメリカ	1845-1924	シベリア	1885	1973
Consten, H. J. T.	ドイツ	1878-1957	モンゴル	1907-1913	1919-1920
Perry-Ayscough, H. G. C.	アイルランド	1875-1915	モンゴル	1913	1913
Korostovetz, I. J	ロシア	1862-1933	モンゴル	1912	1926
Leder, H.	オーストリア	1843-1921	中央モンゴル	1891-1905	2013
Le Munyon, E. C.	アメリカ	?-?	ゴビ	1912	1913
Monteton, D.	ドイツ	?-?	モンゴル	1920's	
Geleta, J.	ハンガリー	1895-1965	モンゴル	1920-1929	1934
Radnóti-Róth, A.	ハンガリー	1893-1964	モンゴル	1922	

(人物の国別、生年順については、注1に示したホームページで確認することができる。この表では本稿に登場する順を踏襲することによって、写真資料の出現時期、所在地別などの特徴を把握しやすくしている。)

小長谷 モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）

写真の有無	撮影者	写真資料所在	備考
○		フランス国立図書館	
△		フィンランド国立博物館	
○	Pälsi.S.L.	フィンランド国立博物館	
○		フィンランド国立博物館	
○		遺族	
○		遺族	
○		遺族	[]は写真展
○		フィンランド国立博物館	
○		ハンガリーアカデミ東洋図書室	
○		本人	
○		ブダペスト大学	
○		イギリス国立図書館	
○			
○		スイス写真財団	
○		ヘディン財団	
○		スウェーデン国立民族学博物館	
○		ウプサラ大学	
○		遺族	
○		デンマーク国立博物館	
○		デンマーク国立博物館	
○		ケンブリッジ大学	[]は写真展
○	Yvette Borup	アメリカ自然史博物館	
○			
○		ポーランド国立科学文書館	
○		アメリカ議会図書館	
○		MPA	
○	Korostovetz など		
○			
○			
○		ナショナルジオグラフィック社	
○		ボン大学	
○			
○		MPA	

附表 2 王立地理学協会におけるモンゴル関係写真資料の調査概要

RGS Box #	番号始まり	番号終わり	概要	備考	主な写真
A128			亞東印畫輯	135-1 ~ 135-10 まで：西大興安嶺 Tapanshan キャプションは英語。キャプションは東洋文庫の相原氏によると、ほぼ忠実に日本語から英語に翻訳されていることが確認できた。英語化された経緯は不明。SOAS のアーカイブスにも、宣教師が買い求めて、ロンドンに送ったものが保存されている。	
A129			亞東印畫輯	キャプションは英語。キャプションは東洋文庫の相原氏によると、ほぼ忠実に日本語から英語に翻訳されていることが確認できた。英語化された経緯は不明。SOAS のアーカイブスにも、宣教師が買い求めて、ロンドンに送ったものが保存されている。	
L123	PR/034157	PR/034227	R. Hayne	R. Hayne は農民で、世界中にハンティングの旅をしていた。RGS で講演したり、雑誌に写真を載せる活動も。ホブドとオリヤスタイ間の写真、地名が全部記録されている。写真はすべてパノラマサイズ (約 8 × 28cm)	PR/034175: ホブドアンバン PR/034184: the kossa gol ホスゴルでは？河川敷に木が生えているのが珍しい写真 PR/034192: 北モンゴルの風景。 PR/034208: ほろゲル写真。 kalmik Yurt at Chagan Burgaza チャガンボルガストルゲート。 PR/034220: ウリヤスタイ町のハシヤー細い木材がたくさん作られている。
L124	PR/034228	PR/034279	Lt G. C. Binsteed O. Lattimore A. S Kent 1914	モンゴル関係は PR/034247-PR/034276 まで Lt G. C. Binsteed O. Lattimore A. S. Kent 撮影年は 1914 年	PR/034277: Binsteed の Sudjict Gung, wife, a Lama brother and Urga PR/034278: ラティモアによる古墳群 PR/034279: 1914 年 Mongol well between Urga and Uliastai (ウルガとオリヤスタイ間にある井戸)。
L125	PR/034280	PR/034302	A. S. Kent	この箱は全部 Kent による写真。 撮影年は 1914 年。 タイトルはタイプされている。写っているものはウルガとオリヤスタイ、そしてその道中に撮ったもの。ウルガのザハなどがある。	

小長谷 モンゴルで撮影された写真の歴史 (1880-1930)

RGS Box #	番号始まり	番号終わり	概要	備考	主な写真
S574	PR/089750	PR/089829	East Indies (当時の東南アジアをさす) R. C. Andrews J. N. Behrens Lt G. C. Binstead	PR/089750-PR089753 East Indies サラワクでモンゴルに関係なし。 R. C. Andrews PR089754-PR/089761 アメリカ自然史博物館のウェブサイトで見られるものと同じもの。 J. N. Behrens PR089762-PR/089822 撮影年 1934 年。内モンゴルでの写真。百霊廟 この人は Behrens スウェーデン人のミッシヨナリーと思われる。旅行しただけの人かもしれない。ジャーナリスト? Lt G. C. Binstead PR089823-PR/089829 Binstead の写真は 3 箱にまたがっている。	PR/089798: Larson とその妻 PR/098811: スウェーデン人 Gunzel も出てくる。 PR/098812: Larson's temple とキャプションが書いてある写真。 PR/089818: 徳王と日本人と車の写真。 PR/089821: Larson's temple と書いてある写真。後ろの丘からの全体が写っている。
S575	PR/089830	PR/089939	Lt G. C. Binstead	この箱は全部 Lt G. C. Binstead による写真。 Sue はこれらの写真を写真集に入れた。Lt G C Binstead の写真で RGS に残っているものは全部で 219 枚。	PR/083939 ほろゲル写真の裏に記載あり。
S576	PR/089940	PR/089999	Lt G. C. Binstead A. A. Borradaile Sir S. Head C. D. Major C. W. Bruce	Lt G. C. Binstead PR/089940-PR/089952 Binstead の続き。 A. A. Borradaile PR/089953-PR/089970 撮影年は 1893 年 写真はおもにホブドで撮影したもの。 Sir S. Head PR/089971-PR/089989 撮影年は 1919 年。 Major C. D. Bruce PR/089990-PR/089999 撮影年は 1901 年と 1902 年人の写真がメイン。	PR/089972 Station of Chinese Motor company [大成]と書かれている。ゲルの前で人びとがしゃがんでいる。 PR/089975-PR/089977 は冬のウルガの興味深い写真。 Main street と書かれている。 PR/089979 PR/089984 (PR/089988 の可能性もある) Chinese dying sheepskin in Urga 羊の毛皮を染色して、建物の屋根にまで干している写真。 PR/089987 "100 trees" と書いてあるゾーンモドの写真。
S577	PR/090000	PR/090059	C. D. Major C. W. Bruce Campbell	Major C. D. Bruce PR/090000-PR/090003 前箱からの続き。 C. W. Campbell PR/090004-PR/090059 撮影年は 1902 年。	PR/090014 "Roman Chapel in Mongolia" と書いてある。大きな教会建築の写真。
S578	PR/090060	PR/090119	C. W. Campbell Dedley-Buxton Lt P. T. Etherton M. H. Hincks Beach A. S. Kent	C. W. Campbell PR/090060-PR/090091 前箱からの Campbell 続き。 Dedley-Buxton PR/090092-PR/090097 撮影年は 1922 年。計 6 枚。 Lt P. T. Etherton PR/090098-PR/090100 撮影年は 1910 年。 M. H. Hincks Beach PR/090101-PR/090113 撮影年は 1903 年 内モンゴル。 A. S. Kent PR/090114-PR/090119 撮影年は 1914 年 ホブドなど。	PR/090114 葦? Reed みたいな植物で作った浮島で渡船をしている。風景 植物利用 Tel gol おそらくホブド。

RGS Box #	番号始まり	番号終わり	概要	備考	主な写真
S579	PR/090120	PR/090179	A. S. Kent O. Lattimore J. H. Miller	A. S. Kent PR/090120-PR/090128 前箱からの続き、ホブド、ウルガあり。 O. Lattimore PR/090129-PR/090163 撮影年は 1926-1927 年。内モンゴル。 J. H. Miller PR/090164-PR/090179 撮影年は 1908 年。ハンティングと自然風景が多い。	PR/090122 ウルガの刑務所、刑務所の塀はすべて材木で四角く、これらの材木で囲ってある。 PR/090149 漢人商人から雑穀を買って、それを煎る女性。その背後に、乾燥中で立てかけてある材木多数。
S580	PR/090180	PR/090250	J. H. Miller I. Morse 大谷光瑞 Dr. A. D. Smith	J. H. Miller 撮影年は1908年。PR/090200までの 21 枚が Miller によるもの。内容は狩猟と自然風景。 I. Morse PR/090201-216 合計 16 枚、撮影場所はオリヤスタイかホブドと推測できる。ほぼ人物写真である。 大谷光瑞 PR/090217-PR/090219 合計 3 枚、金採掘風景。中国領トルキスタン。 Dr. A. D. Smith アメリカ人医師。 PR/090220-PR/090250 ウルガとオルホンの写真。	PR/090228: Dr. A.D. Smith による木をテント型、円錐形に立てて置いてあり、使うために乾燥させているように見える写真。
アルバム			M. P. Prince	M. P. Prince D. Carruthers と一緒に行って、写真を撮った人。撮影は 1910 年 4 月から 1913 年 3 月。 シベリア、モンゴル、西中国、トルキスタン、アルメニア。 トランスコーカサス、シベリア鉄道からミヌシンスク、街の風景、人々の風景、針葉樹、植物。 番号、本人による写真キャプションあり。ウリヤンハイ = tuva, アルジャン遺跡 (tuva) ケムチック Kemchick, tuva から南下して、モンゴルへ、ドゥルベト Ing-Fu (人名) Visiting Card (通行証? のようなもの) にある。6 guard post = 6 個の関所を所轄しているところ国境警備。 M. P. Price と J. H. Miller の氷河の写真。 Carruthers の本に出てくる 3 人の写真。	S0016611 寺院。

史料文献

〈ロシア語〉

〈アルバム〉

- Charushin, N. A.
1888 *Vidy Urgi*. Irkutsk: Irkutskie Izdatel'stvo Prosveshchenie.
- Lushnikov, A. A.
1894 *Zapisi puteshestvii Mongolii*.
- Potantin, G and A. Adrianov
1879 *Vues et types de la mongolie occidentale (Vidy i tipy Severo-Zapadnoi Mongolii; Mongol'skaia Ekspeditsiia. Imperatorskogo Russkago Geograficheskago Obshchestva. S negativov' A. V. Adrianova)*. St. Petersburg: Imp. Russk. Geog. Obshchestvo.
- Tumanov, S. B.
1879 *Ekspeditsiya po Vostochnoi Sibiri i Mongolii 1878–1879*. St. Petersburg: Imp. Russk. Geog. Obshchestvo.

〈旅行記〉

- Bogolepov, M. I. and M. N. Sobolev
1911 *Ocherki russkoi-mongol'skoi toRGsvli: ekspeditsiia v Mongoliiu*. Tomsk: Sibirskoe T-vo Pechatnogo Dela.
- Burdukov, A. V.
1969 *V Staroi i novoi Mongolii*. Moskva: Nauka.
- Grumm-Grzhimailo, G. E.
1914 *Zapadnaia Mongoliia i Uriankhaiskii kraï*, Tom.1. St. Petersburg: Imp. Russk. Geog. Obshchestvo.
- Konagaya, Y. et al. (eds.)
2007a *A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia* vol. 1 (Senri ethnological Report 66). Osaka: National Museum of Ethnology.
2007b *A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia* vol. 2 (Senri ethnological Report 67). Osaka: National Museum of Ethnology.
2008a *A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia* vol. 3–1 (Senri ethnological Report 74). Osaka: National Museum of Ethnology.
2008b *A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia* vol. 3–2 (Senri ethnological Report 75). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kotwicz, W.
1914 *Kratkii obzor istorii i sovremennnago politicheskago Mongolii*. St. Petersburg: Izdaniye O-va "Kartograficheskoe Zavadeniye A. Il'ina".
- Kozlov, P. K.
1905–1907 *Mongoliia i Kam*, Tom1–5. St. Petersburg: Imp. Russk. Geogr. Obshchestvo.
1923 *Mongoliia i Amdo i mertvyi gorod Khara-Khota*. St. Petersburg: Gosd. Izd. Geogr. Obshchestvo.
- Potantin, G. N.
1881–1883 *Ocherki Severo-zapadnoi Mongolii*, Tom1–4. St. Petersburg: Gosd. Izd. Tipografiya B. Bezobrazova.
1893 *Puteshestvie 1884–86 gg. Tangutsko-Tibetskaya okraina Kitaia i tsentral'naya Mongoliia*, Tom1–2. St. Petersburg: Gosdarstrennoe izdatel'stvo geograficheskoi literatury.
- Pozdneev, A. M.
1896–1898 *Mongoliia i mongoly. Rezultaty poezdki v Mongoliiu, ispolnennoi v 1892–1893 gg.* St. Petersburg: Tipografiya imperatorskoi akademii nauk.
- Przhevalsky, N. M.
1875–1876 *Mongoliia i strana tangutov*, Tom1–2. St. Petersburg: Alistorus.

- 1888 *Ot Kiakhty na istoki Zheltoi Reki*. St. Petersburg: Imp. Russk. Geog. Obshchestvo.
 Riabushinsky, P. P.
 1912 *Moskovskaia ToRGSvaia Ekspeditsiia v Mongoliuu*. Moscow: Publishing House of P. P. Riabushinskii.

〈英語〉

- Albertsen, K. P.
 1921 *Recent Events in Urga. A Foreigner's Experiences. Extracts from the Diary of Mr. K. P. Albertsen*. Peking: Tientsin Press Ltd.
- Andrews, R. C.
 1921 *Across Mongolian Plains: A Naturalist's Account of China's "Great Northwest"*. New York and London: D. Appleton and Company.
 1926 *On the Trail of Ancient Man: A Narrative of the Field Work of the Central Asiatic Expeditions*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- Braae, C.
 2017 *Among Herders of Inner Mongolia The Haslund-Christensen Collection at the National Museum of Denmark*. Copenhagen: Aarhus University Press.
- Donner J. and I. Janhunen
 2014 *Kai Donner: Linguist, Ethnographer, Photographer*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Forbath, L.
 1936 *The New Mongolia by Geleta, Joseph*. London and Toronto: W. Heinemann.
- Gilmour, J.
 1883 *Among the Mongols*. New York: American Tract Society.
- Haslund-Christensen, H.
 1934 *Tents in Mongolia (Yabonah): Adventures and Experiences among the Nomads of Central Asia*. New York: E. P. Dutton and Company.
 1935 *Men and Gods in Mongolia (Zayagan)*. New York: E. P. Dutton and Company.
 1943 *The Music on the Mongols; part 1. Eastern Mongolia. (Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin: The Sino-Swedish Expedition; Publication 21; VIII; Ethnography; 4)*. Stockholm: Tryckeri aktiebolaget Thule.
- Lang, M-K. and S. Bauer
 2013 *The Mongolian Collections; Retracing Hans Leder*. Vienne: Austrian Academy of Sciences.
- Larson, F. A.
 1930 *Larson Duke of Mongolia*. Boston: Little, Brown, and Company.
- Le Munyon, E. C.
 1913 *Lama's Motor-Car: A Trip Across the Gobi Desert by Motor-Car. The National Geographic Magazine* 24(5): 640–670.
- Mannerheim, G.
 2008 *Across the Asia from West to East in 1906–1908*. Helsinki: Otava.
- Perry-Ayscough, H. G., R. B. Otter-Barry, and C. Macdonald
 1913 *With the Russians in Mongolia*. London: John Lane, Bodley Head.
- Prejevalsky, N.
 1876 *Mongolia, the Tangut Country, and the Solitudes of Northern Tibet: Being a Narrative of Three Years' Travel in Eastern High Asia*. Translated by E. Delmar Morgan, 2 vols. London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington.
- Tulisow, J., O. Inoue, A. Bareja-Starzyńska, and E. Dziurzyńska (eds.)
 2012 *In the Heart of Mongolia: 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912: Studies and Selected Source Materials*. Cracow: Polish Academy of Arts and Sciences (with a DVD).

〈モンゴル語・フランス語・ドイツ語・ハンガリー語・フィンランド語ほか
諸言語による文献〉

- Bogolepov, M. I. and M. N. Sobolev
2011 *Oros, Mongolyn Khudaldaany Nairuulal*, Ulaanbaatar: Admon. (original Russian 1911, translated into Mongolian)
- Bouillane de Lacoste, É. A. H.
1909 *de la mission du commandant de Bouillane de Lacoste en 1909 en Mongolie*.
- Chaffanjon, J.
1897 Récit du voyage publié, *Comptes rendus des séances de la Société de Géographie*, pp. 84–86.
1898 *Rapport sur une Mission Scientifique dans l'Asie Centrale et la Sibirie*. Paris: Imperial National.
- Chuluun, S. and S. Byrne (eds.)
2019 *Mongol Oron ba Mongolchuud*, vol. 5, Ulaanbaatar: Admon. (in Mongolian and English)
- Chuluun, S. and D. V. Ivanov (eds.)
2015 *Mongol Oron ba Mongolchuud*, vol. 2, Ulaanbaatar: Admon. (in Mongolian and Russian)
- Chuluun, S. and M. V. Medvedeva (eds.)
2017 *Mongol Oron ba Mongolchuud*, vol. 3, Ulaanbaatar: Admon. (in Mongolian and Russian)
- Chuluun, S. and T. I. Yusupova (eds.)
2013 *Mongolian Buddhist Culture: A Study of Monasteries and Temples in Kheniti and Khangai* (Senri Ethnological Report 113). Osaka: National Museum of Ethnology. (in Mongolian and Russian)
- Chuluun, S. et al. (eds.)
2018 *Mongol Oron ba Mongolchuud*, vol. 4, Ulaanbaatar: Admon. (in Mongolian and Russian)
- Consten, Hermann J. T.
1919/1920 *Weiderplätze der Mongolen im Reiche der Chalcha*. Berlin: Verlag Dietrich Reimers A. G.
- Forbáth, László
1934 *A mengűjhadott Mongólia*. Budapest: Franklin-Társulat Magyar Irodalmi Intézet.
- Götting, D.
2005 *Mongolei: Bilder aus der Ferne - Historische Fotografien von Mongoleiforschern Hermann Consten*, exhib.cat. Bonn: Deutsch-mongolische Gesellschaft.
- Granö, G. J.
1993 (1919–1921) *Altai*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Halén, H. T.
1982 *Memoria saecularis Sakari Pälsi*. Helsinki: Finnisch-ugrische Gesellschaft.
- Korostovetz, I. J.
1926 *Von Cinggis Khan zur Sowjetrepublik*. Berlin and Leipzig: Walter de Gruyter.
- Krebs, C. I.
1937 *En Dansker in Mongoliet*. Copenhagen: Berlingske Forlag.
- Ligeti, L.
1933 *Rapport préliminaire d'un voyage d'exploration fait en Mongolie chinoise 1928–1931*. Budapest: Kőrösi Csoma Társaság.
1934 *Sárga istenek, sárga emberek*. Budapest: Királyi Magyar Egyetemi Nyomda.
- Mannerheim, C. R.
2010 *Dagbok förd under min resa i Centralasien och Kina 1906-07-08*. Helsinki: Otava.
2013 *Matka kiinaan - Tiedusteluraportti 1906–1908*, Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- 馬達漢
2009 『馬達漢中国西部考察調研報告合集』烏魯木齊：新疆人民出版社。
- Ollén, G. and J. Eriksson
1943 *Vid Gobiökens Gränser*. Stockholm: Svenska Mongolmissionen.
- Pälsi, S. L.
1911 *Mongolian matkalta*. Helsinki: Otava.

- Radde, G.
1862–1863 *Reisen im Süden von Ost-Sibirien in den Jahren 1855–1859*. St. Petersburg: Buchdruckerei der Akademie der Wissenschaften.
- Radlov, V. V.
1892 *Atlas der Altherthümer der Mongolei*. St. Petersburg: Buchdruckerei der Akademie der Wissenschaften.
- Ramstedt, G. J.
1944 *Seitsemän Retkeä Itään 1898–1912*. Helsinki: Wsoy.

〈邦訳された旅行記〉

- ギルモア, J.
1941 『蒙古人の友となりて』 後藤富男訳, 東京: 生活社。
- コロストウェッツ, J.
1937 『蒙古近世史』 高山洋吉訳, 東京: 東學舎。
- ハズルンド, H.
1942 『外蒙の赤色地帯』 松本敏子訳, 東京: 育成社弘道閣。
1939 『蒙古の人と神』 内藤岩雄訳, 東京: 外務省文化事業部。
1950 『蒙古の旅』 (上巻) (下巻) 内藤岩雄訳, 東京: 岩波書店。
- フォーバス, L.
1938 『新蒙古風土記』 東京: 育生社。
- プルジェヴァリスキー, N. M.
1939 『蒙古と青海』 田村秀文・高橋勝之共訳, 東京: 生活社。
- ボズドネフ, A. M.
1908 『蒙古及蒙古人』 東亜同文館訳, 東京: 東亜同文館。
- ポターニン, G. N.
1945 『西北蒙古誌』 東亜研究所訳, 東京: 龍文書局。
- ラムステッド, G.
1992 『七回の東方旅行』 荒牧和子訳, 東京: 中央公論社。
- ラルソン, F. A.
1939 『蒙古風俗誌』 高山洋吉訳, 東京: 改造社。

参 照 文 献

〈日本語〉

- 天野尚樹
2006 「極東における帝立ロシア地理学協会——サハリン地理調査を手がかりとして」 北海道大学スラブ研究センター編 『ロシアのなかのアジア／アジアの中のロシア (Ⅲ)』 (21世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集) pp. 107–119, 札幌: 北海道大学スラブ研究センター。
- 石濱裕美子
2016 「マンネルヘイムのアジア旅行関連資料とそれに基づくチベット仏教徒の動向について」 『内陸アジア史研究』 31: 145–163。
- 植村英一
1992 『グスタフ・マンネルヘイム フィンランドの白い将軍』 東京: 荒地出版社。
- キプリング, R.
2010 『少年キム』 (ちくま文庫) 斎藤兆史訳, 東京: 筑摩書房。
- 小長谷有紀
2017 「ロシアのシベリアに対する使命感」 川田順造編著 『ナショナル・アイデンティティ

小長谷 モンゴルで撮影された写真の歴史 (1880-1930)

- を問い直す』 pp. 122-124, 東京：山川出版社。
- 2020 「フィンランドにおけるモンゴル高原への学術探検史と映像記録」東洋文化研究会編『もう一度アジアを見直そう日本人』 pp. 251-260, 東京：東文研編集委員会。
- 高野雅之
1998 『ロシア思想史—メシアニズムの系譜』 東京：早稲田大学出版部。
- 高橋則英
2017 「ガラス乾板の歴史と保存の意義」『文化財としてのガラス乾板—写真が紡ぎなおす歴史像』 pp. 2-19, 東京：勉誠出版。
- 田中克彦
2013 『シベリアに独立を—諸民族の祖国をとりもどす』 東京：岩波書店。
- バイカル
2019 「スウェーデンのモンゴルミッションについて」『日本とモンゴル』 53(2): 92-101。
- ホップカーク, P.
1992 『ザ・グレート・ゲーム—内陸アジアをめぐる英露のスパイ合戦』 京谷公雄訳, 東京：中央公論社。
- 吉田雄介
2010 「王立地理学協会とイラン—1830年代から1840年代にかけてのイランに関する西洋の地理知識と言説の研究」『関西大学東西学術研究所紀要』 43: 35-63。

〈日本語以外の諸言語〉

- Aalto P.
1971 *Oriental Studies in Finland 1828-1918*. Helsinki: Societas Scientiarum Fennica.
- Andreyev, A. I. and T. I. Yusupova
2018 Petr Kuzmich Kozlov (1863-1935). In I. Andreyev, M. Baskhanov, and T. Yusupova (eds.) *The Quest for Forbidden Lands; Nikolai Przhevalskii and His Followers on Inner Asian Tracks*, pp. 212-254. Leiden: Brill.
- Baasanjargal, B.
2013 Concerning Certain Issues of Mongolian Historical Photography Studies. (<https://historicimages.mn/node/237/> accessed 2020-09-30)
- Bassin, M.
1983 The Russian Geographical Society, the “Amur Epoch” and the Great Siberian Expedition 1855-1863. *Annals of the Association American Geographers* 73(2): 240-256.
- Birtalan, Ágnes
2016 *The Open-Hearted People of Chinggis Khan: Life and Work of Gábor Bálint of Szentkatolna, the First Hungarian Mongolist, and His Materials Collected in 1871-1873 on the Language and Culture of Khalkha Mongols and Kalmyks*. Ulaanbaatar: Embassy of Hungary in Mongolia.
2020 *Treasures of Mongolian Cultural and Historical Heritage in Hungary*. Ulaanbaatar: Admon.
- Boikova, E.
2002 Russians in Mongolia in the Late 19th -Early 20th Centuries. *Mongolian Studies* 25: 13-20.
- Boldbaatar, J.
2003 *Mongol Ulsyn Tüükh* 5 boti. Ulaanbaatar. (in Mongolian)
- Bosshard, W.
1938 *Kühles Grasland Mongolei. Zauber und Schönheit der Steppe*. Zürich: Büchergilde Gutenberg.
- Bouillane de Lacoste, É. A. H.
1910 Exploration de la Monglie. *Bulletin de la Société de géographie et d'études coloniales de Marseille* 1910: 61-67.
- Bradley, J.
2009 *Voluntary Associations in Tsarist Russia; Science Patriotism, and Civil Society*. Massachusetts: Harvard University Press.
- Budenz, J.
1879 *Über die Verzweigung der ugrischen Sprachen. (Separat-Abdruck aus der Festschrift zum*

fünfzigjährigen Doktorjubiläum des Herrn Professor Benfey gewidmet. Beiträge zur Kunde der Indogermanischen Sprachen, IV. Bd.). Göttingen: Georg-August-Universität Göttingen.

- Darevskaya, E. M.
 1994 Pis'ma I. M. Maiskovo A. V. Burdukovu. *Mongolica*-III: 47–56.
 2011 *Siberi ba Mongol*. Ulaanbaatar: Mönkhii Üseg (original in Russian, translated into Mongolian)
- Devlet, M. A.
 2004 *Aleksandr Vasil'evich Adrianov*. Kemerovo: Institute of Archaeology RAN Publishing.
- Eklof, B. and T. Saburova
 2017 *A Generation of Revolutions: Nikolai Charushin and Russian Populism from the Great Reforms to Perestroika*. Broomington: Indiana Univ. Press.
- Endicott, E.
 1999 Russian Merchants in Mongolia: The 1910 Moscow Trade Expedition. In S. Kotkin and B. A. Elleman (eds.) *Mongolia in the Twentieth Century*, pp. 59–68. London and New York: Routledge.
- Gongor, D.
 1964 *Khovdyn Khuraangui Tüükh*. Ulaanbaatar. (in Mongolian)
- Hauner, M.
 1990 *What is Asia to Us?: Russia's Heartland Yesterday and Today*. London: Routledge.
- Honti, L.
 1979 *Characteristic Features of Ugric Languages: Observations on the Question of Ugric Unity*. *Acta Linguistica Academiae et Scientiarum Hungaricae* 29: 1–26.
- Idshinnorov, S.
 1987 *XLX–XX Zuuny Zaag Dakhi Mongolyn Niigem-Ediin Zasgiin Baidlyn Zarim Asuudal*. Ulaanbaatar: Shinjilekh Ukhaany Akademiin Khevllel.
- Ivanov, D. V.
 2014 Pervye fotografii, sdelannye v Mongolii russkimi puteshestvennikami. *Strany i narody Vostoka*, 35: 173–175. Moskva: Nauka.
- Ivanov, D. V. and S. Chuluun
 2015 Pervye Photoillustrativnye istochniki po Mongolii v kollekttsiakh Muzeia Antropologii e Etnographii (Kunstkamera) RAN. In S. Chuluun and D. V. Ivanov (eds.) *Mongoliia i Mongoly*. Ulaanbaatar: Admon.
- Janhunen, J.
 2012 Mongolian Studies in the Nordic Countries: A Brief Historical Survey. “北方人文研究” 5: 43–55.
- Kruger, J. R.
 1982 Western Travelers in Central Asia. *The Journal of Popular Culture* 16(1): 135–146.
- Lomakina, I.
 2001 *Velikii Beglets: Dokumentalnaya povest'. Moscow: Dizain Informatyia Kartografiya*.
- Nagy, L. J.
 1959 G. Bálint's Journey to the Mongols and his Unedited Kalmuck Texts. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 9: 311–327.
- Nyamdorj, B.
 2014 A. V. Burdukovin namtar, tuunii 20 zuuny ehen ueiin baruun mongolyn tuuhend holbovdoh niitleluud. *Bibliotheca Oiratca* 34: 11–18. (in Mongolian)
- Riasanovsky, N. V.
 1969 *Nicholas I and Official Nationality in Russia, 1825–1855*. Berkley: University of California Press.
- Saburova, T.
 2020 Geographical Imagination, Anthropology, and Political Exiles: Photographers of Siberia in Late Imperial Russia. *Sibirica* 19(1): 57–84.
- Sárközi, A. and Á. Birtalan
 1997 Hungarian Explorers of Mongolia in the Twentieth Century. In A. Sárközi (eds.) *A New Dialogue between Central Europe and Japan*. Institute for Social Conflict Research, HAS –

小長谷 モンゴルで撮影された写真の歴史 (1880–1930)

- The International Research Center for Japanese Studies*, pp. 119–122. Budapest and Kyoto: International Research Center for Japanese Studies.
- Sergeev, V. D.
2001 *Nikolai Apollonovich Charushin: narodnik, obshchestvennyi deiatel', izdatel', kraeved. K 150-letiiu*. Vyatka: Kirov Branch of the Moskov Humanitarian Economic Institute.
- Shearer, D.
2019 Heroes Sung and Unsung: Explorers' Narratives of Mongolia, 1890s to the 1930s. *Asiatische Studien* 73(4): 761–798.
- Somfai Kara, D.
2008 Rediscovered Buriat Shamanic Texts in Vilmos Diószegi's Manuscript Legacy. *Shaman* 16(1–2): 89–106.
- Teleki, K.
2001 Paintings photographic Images representing the Mongolian Monastic Capital City. *Orientalista Nap 2001*. Budapest: Eötvös Loránd University (Department of Inner Asian Studies).
- Tiitta, A.
2009 Suomalaisten tutkimusmatkat autonomian aikana in Löytönen. In L. Markku (ed.) *Suomalaiset Tutkimusmatkat*, pp. 29–80. Helsinki: Soumalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Wahlquist, H.
2016 Mongolmissionen och andra svenska foretag i gudstjänst. *Kina Rapport* 2016: 30–33.
- Wang, H. and J. Perkins (eds.)
2008. *Handbook to the Collections of Sir Aurel Stein in the UK*. London: The British Museum.
- Yusupova, T. I.
2006 *Mongol'skaya komissiya Akademii nauk: Istoriya sozdaniya i deyatelnosti 1925–1953 gg.* St. Peterburg: Nesor-Istoriya.
2008 P. K. Kozlov's Mongolia and Sichuan Expedition (1907–1909) In I. F. Popova (ed.) *Russian Expeditions to Central Asia at the Turn of the 20th Century*. St. Peterburg: Slavia.
- Yusupova, T. I. and S. Chuluun
2019 Fotokollektzii rossiiskikh issledovatelei v mongol'skikh arkhivakh kak istochniki po izucheniyu Mongolii. *Mongolica*. T. XXII. No. 2: 58–66.